京都府埋蔵文化財情報

第 2 号

豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）発掘調査概要……竹原一彦…… 1
篠・西長尾窯跡発掘調査概要……石井清司…… 8
千代川遺跡発掘調査概要……村尾政人……15
長岡京の条坊……中山修一……22
「銅出徐州」の徐州 ……福山敏男……35

—昭和56年度発掘調査略報—
木津遺跡……大槻真純……39
土師南（福知山高校）遺跡……辻本和美……41
長岡京跡右京第76・78・79次……山口　博……42

資料紹介　有熊遺跡の出土遺物……長谷川達……48
府下遺跡紹介　3. 吐師七ツ塚古墳……編 集 部……54
センターの動向……57
府下報告書等刊行状況一覧……59
受贈図書一覧……63

1981年12月

財団法人　京都府埋蔵文化財調査研究センター

豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）

(1)　S B 04

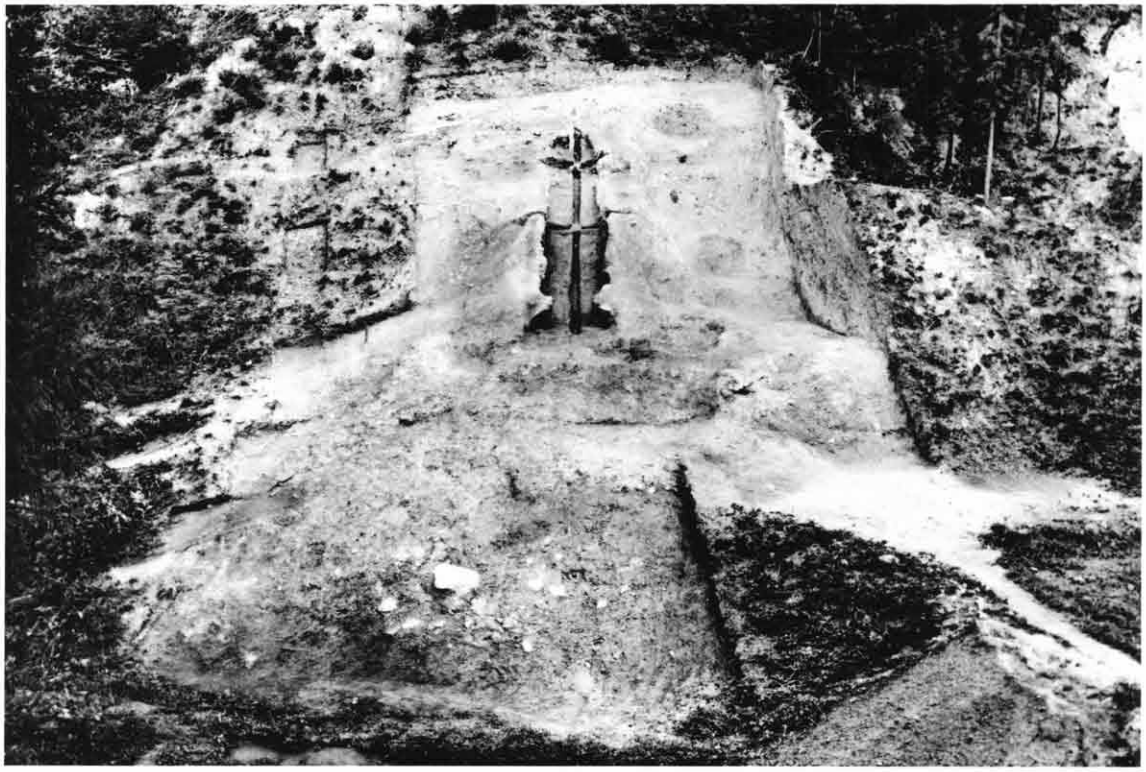
(2)　古墓(No.6)蔵骨器出土状況

豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）

(1) 経塚（No.27）

(2) 経筒埋納状況

篠・西 長 尾 窯 跡



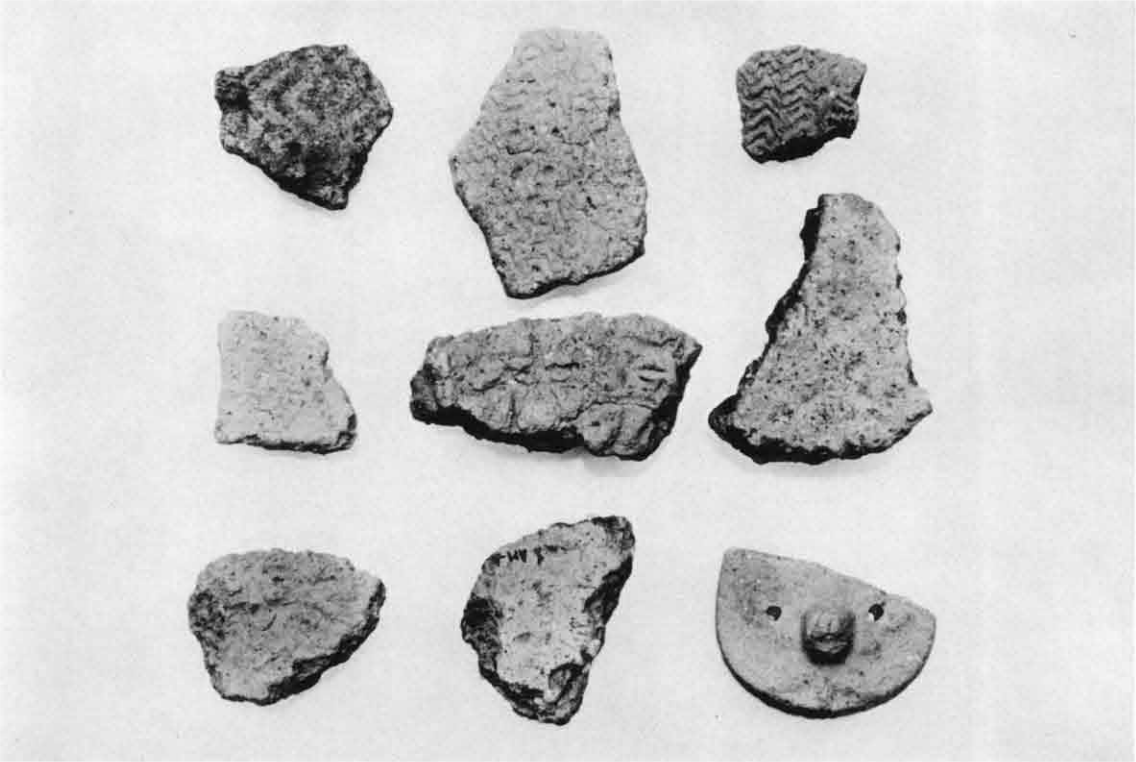
(1) 西長尾３号窯

(2) 西長尾１・４号窯

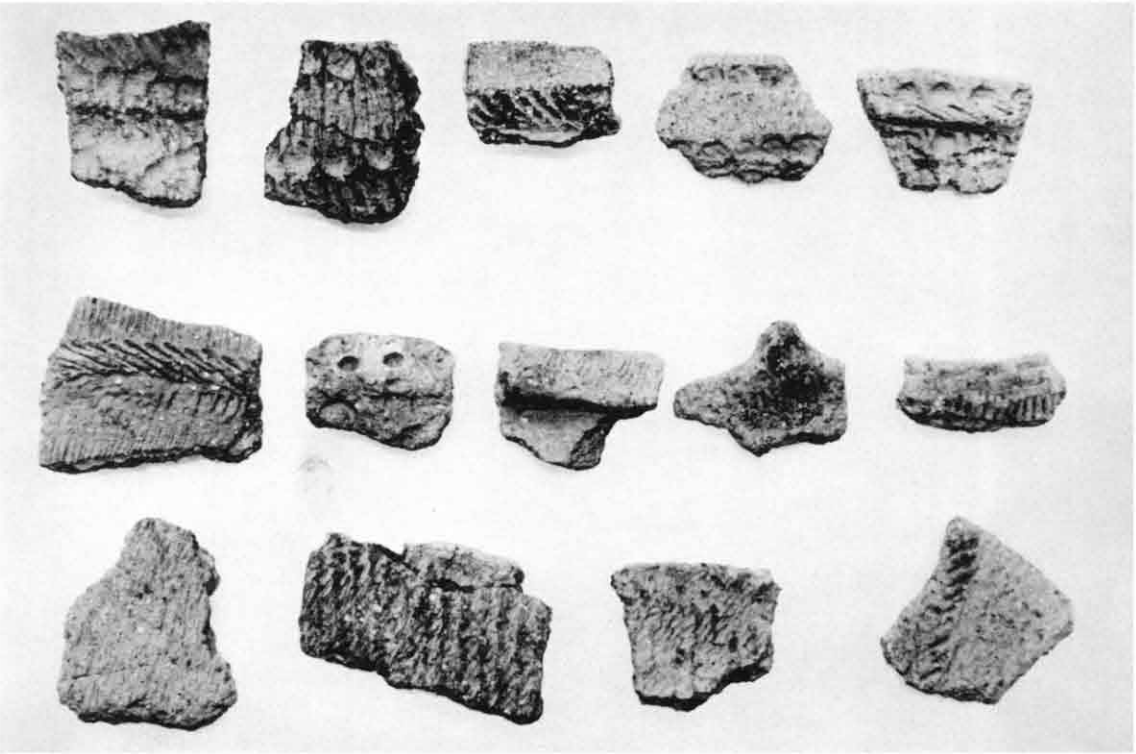
千 代 川 遺 跡

(1) 千代川遺跡全景（南から）

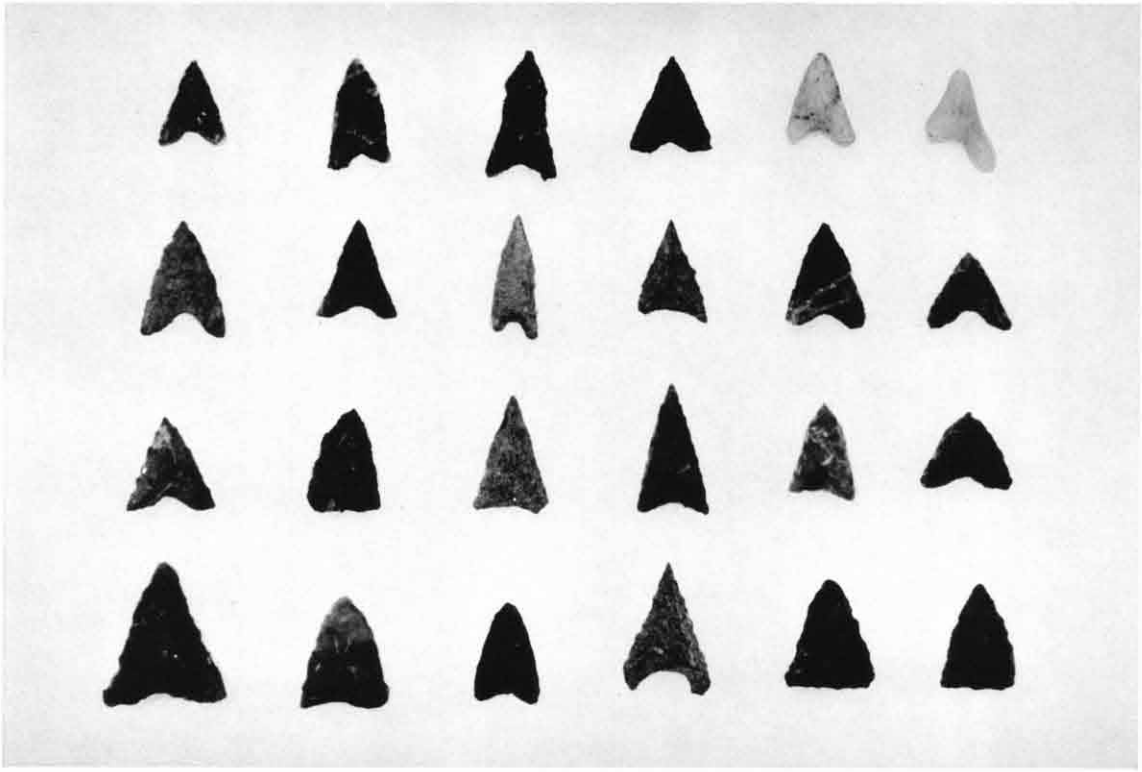
(2) 竪穴式住居跡、掘立柱跡ＳＢ0201・ＳＢ0205（西から）



(1) 縄文時代早期の土器、土製品



(2) 縄文時代中期の土器



(3) 石 鏃

(4) 石錘・石製品

豊富谷丘陵遺跡（大道寺跡）発掘調査概要

竹　原　一　彦

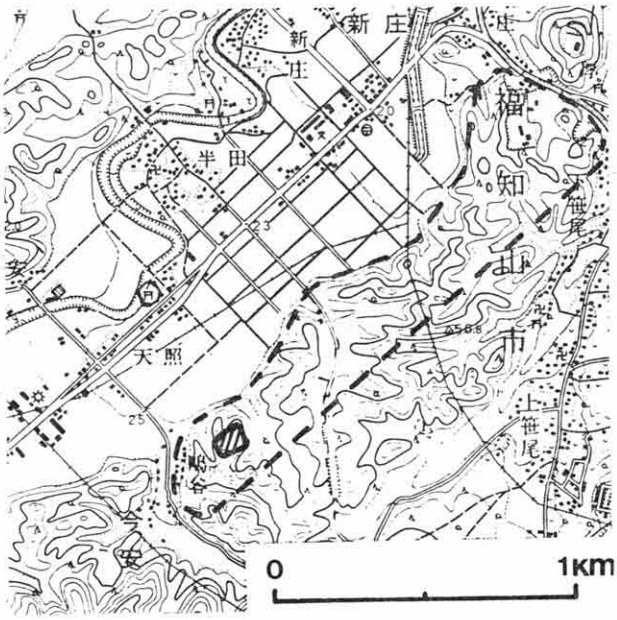
1.　はじめに

本調査は，国鉄福知山線及び山陰本線の複線電化のための電車基地建設工事に伴う発掘調査である。

調査地は，福知山市字今安小字大道に位置する。昭和54年度の遺跡分布調査で中世の土器片及び人骨片が採集され，また付近に「寺の口」・「寺の前」の地名や，調査地を寺山と通称することから，この地に中世の寺院の存在が推定された。今回の調査地は寺域内とみられる３か所のテラス部（約2000㎡）を対象とし，寺院関係の遺構検出を目的として昭和56年５月６日から昭和56年８月18日まで発掘調査を実施した。

2.　検出遺構

調査地内Ａ地区・Ｂ地区のテラス部において建物跡４棟を検出した。ほぼ正方形を呈するＡ地区では４間×４間の建物跡２棟，やや狭長なＢ地区では４間×３間，３間×３間の建物跡各々１棟を検出した。また調査地最上部テラス（Ｃ地区）では古墓・方形塚・経塚・古墳時代の墓壙３か所を検出した。



第１図　調　査　地　位　置　図

ＳＢ01

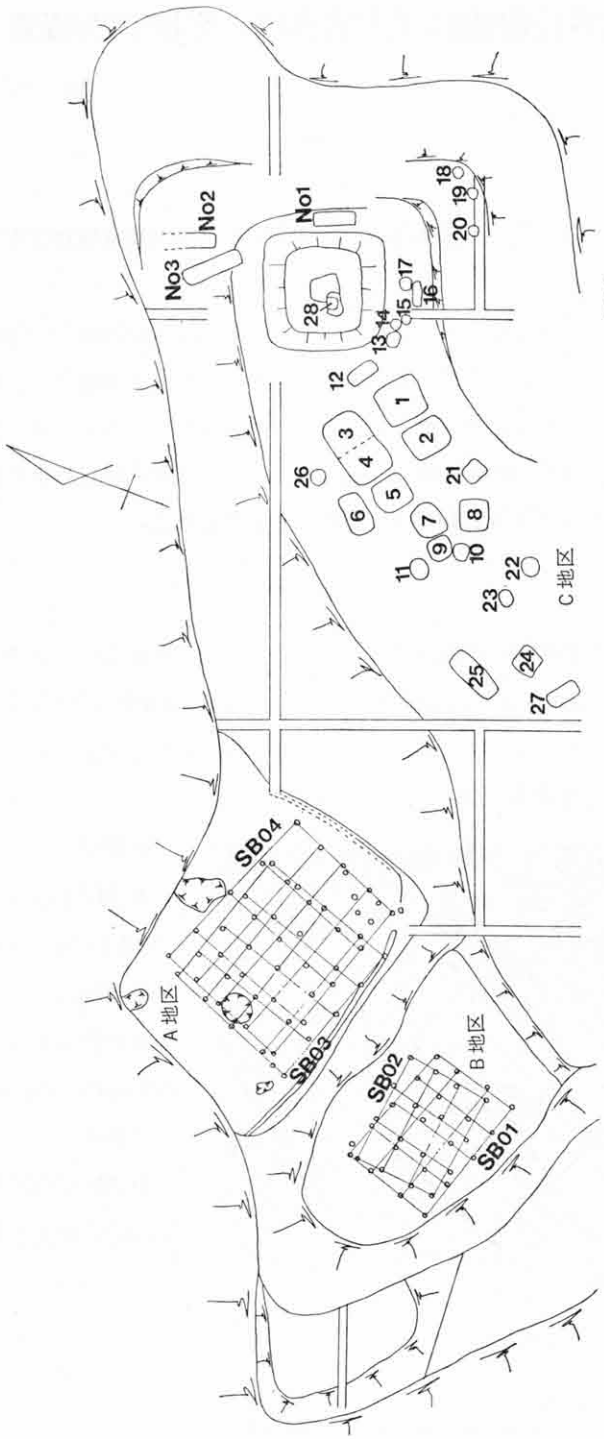
Ｂ地区で検出した東西４間（８ｍ）×南北３間（６ｍ）の総柱の建物跡である。柱穴掘り方は直経約30cm・深さは最も深いもので約20cmであった。

ＳＢ02

Ｂ地区で検出した東西３間（７ｍ）×南北３間（5.5ｍ）の総柱の建物跡である。ＳＢ01とほぼ同一地点に存在するが，若干中軸線は西側に偏る。

ＳＢ03

Ａ地区で検出した東西４間


No3
No2
No1
28
13
14
15
17
16
18
19
20
12
1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
21
22
23
24
25
26
27
C地区
0
20m
SB04
SB03
A地区
SB02
SB01
B地区

第２図　調査地平面図

(8.5m) ×南北4間 (8.5m) の総柱の建物跡である。大部分の柱穴は深さ約60cm前後まで掘られていた。また一部の柱穴内には河原石による根石が認められた。

ＳＢ04

東西4間 (11m) ×南北4間 (8m) の東西方向に長い総柱の建物である。柱穴はＳＢ03と同様に深さ60cm前後のものが多い。Ａ地区の東端及び南端部には側溝が走り，ＳＢ03の柱穴によって切られていたことから，この溝はＳＢ03の建物跡より古く，ＳＢ04に伴うものと判断される。

古　墓 (第2図 1～26, 28)

Ｃ地区で27基の古墓が確認された。ほとんどの古墓には火葬人骨片が埋葬されていた。古墓の形態には方形に土盛りしたもの (1, 2, 5, 15, 22～24)，土盛り後に河原石を張り付けたもの (3)，周囲に河原石を配石したもの (6～8, 12, 16, 17, 25)，集石をもつもの (9, 10, 26)，その他各種が認められる。土盛りを行った古墓には蔵骨器をもつものともたないものとがあり，蔵骨器には甕，ナベなどの日用雑器を転用していた。また，蔵骨器を伴わない古墓も，火葬人骨の出土状況から木製容器の使用が推察される。これらの古墓は出土遺物等から鎌倉時代から室町時代前半にかけて，次々に造営されていったものと推定される。

経　塚 (第2図 27)

中世古墓群が存在するＣ地区の南端中央部で検出された仏教遺構である。調査前の段階では経塚の存在を示す外部施設等は全く認められなかった。

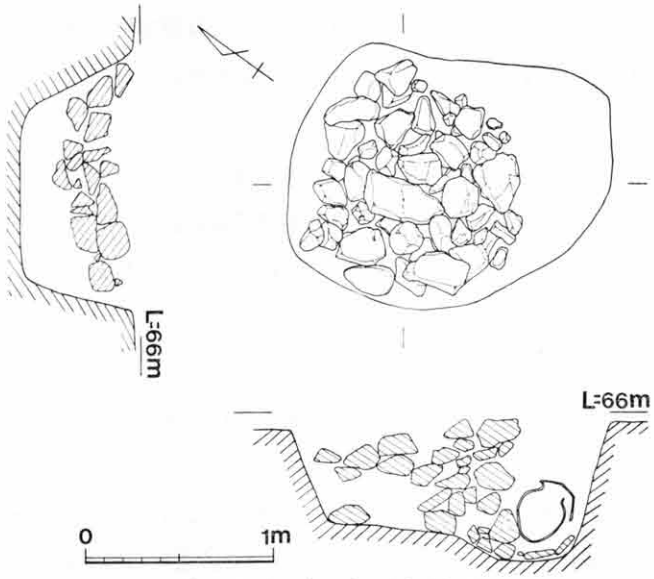
経塚の構造は地山に盛り土を行った後，直径1.7m・幅1.3m・深さ60cmの楕円形の土壙を穿っており，南端部ではさらに直径約60cm・深さ15cmの規模で掘り下げられていた。

土壙中央部には大形の河原石を積み上げて主体部と副室部とを画していた。外容器は土壙の南端に安置され，その周囲に河原石をめぐらせて小石室を構築していた (第4図)。小石室の底面には偏平な河原石を置き，その上面に三方の壁より石を一部突出させて外容器の安定を計っていた。外容器内には経筒3口が納められており(第5図)，片口鉢によって外容器を被蓋していた。主体部にはこの他に何らの遺物もみられなかった。

副室部には上部を被うように20～30cm大の河原石を積み重ねていたが (第3図)，下部には配石等の施設は認められなかった。この副室内からは和鏡・北宋銭等の供養具とみられる遺物が各種出土した。副室部の上部石組みは一部が内側へ落ち凹み，供養具の出土状況から考えても木製容器の存在が推察される。

古墳時代の遺構

中世寺院関係以外に古墳の主体部とみられる墓壙が，Ｃ地区の北東部で3か所検出された。いづれも大部分がすでに削平されており，地山に掘り込んだ底面部を残すのみであった。

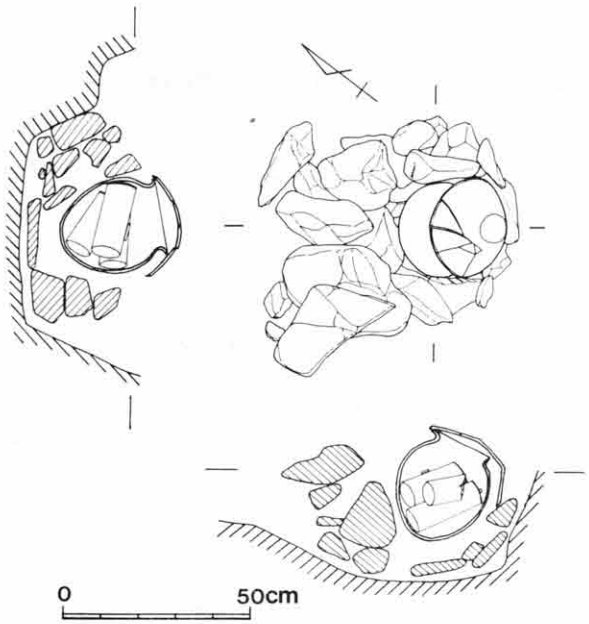


第3図　経　塚　実　測　図(1)

No.1 主体部は全長2.6m・幅70cm・深さ15cmを測り，内部南端部より杯身・杯蓋・無蓋高杯などの須恵器及び土師質坩が出土した。No.2主体部は現存長3.2m・幅85cm・深さ15cm。No.3主体部は全長3.5m・幅80cm・深さ10cmの土壙で，いづれも遺物は出土しなかった。

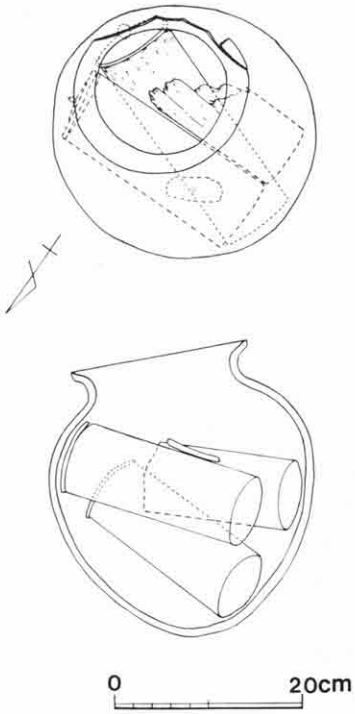
3. 出土遺物

中世の遺物として須恵質の甕・壺・片口鉢や土師質の甕・ナベ・皿及び瓦器・輸入陶磁器等がある。これら遺物の多くは蔵骨器及び古墓埋納品や日用雑器である。須恵質の甕及び土師質ナベは蔵骨器として転用されている。片口鉢もこれら蔵骨器と伴出しており，蓋として使用されたと考えられる。蔵骨器には外面にススの付着が認められるものがあり，日用雑器を転用したものであろう。また蔵骨器と推察される土師質円筒形容器も1点出土している。



第4図　経　塚　実　測　図(2)

出土遺物は古墓群の存在するC地区での出土が大部分を占めているが，



第5図　経筒埋納状況図

建物跡が検出されているA・Bの両地区においても，少量ではあるが瓦器・土師皿・陶磁器類が出土している。

経塚関連出土遺物としては，

須恵質甕	1口	須恵質片口鉢	1口
銅鋳製経筒	1口	竹製経筒	2口
経巻	8巻	菊枝双鳥鏡	1面
景祐元宝	2枚	土師質皿	5枚
白磁片	1片	檜扇片	一括

がある。

経筒は銅鋳製と竹製の2種があり，銅鋳製経筒内には経巻が8巻納められていたが上半分は腐朽していた。竹製経筒内にも経巻とみられる残片がみられた。また竹製経筒の底部及び蓋は木製である。

供養具としての和鏡（直径7.9cm）は腐触が著しく背面の文様は判然としないが，菊文と双鳥をあしらった菊枝双鳥鏡と推定される。この文様は京都府花背別所第1経塚出土(注1)の菊枝双鳥鏡に酷似する。

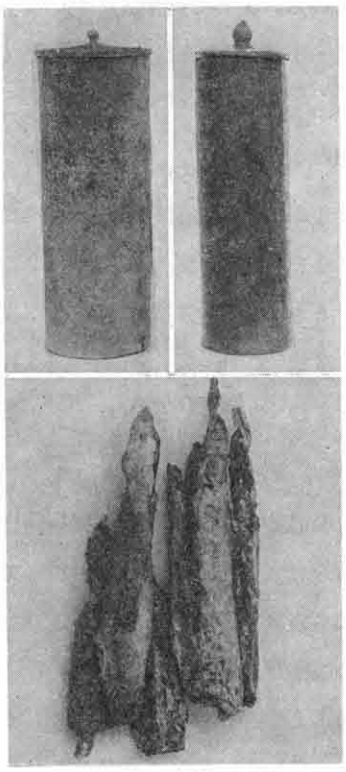
4. まとめ

今回の調査では，前述したように古墳時代と中世の遺構を検出した。

総柱の建物跡は寺院を構成する堂宇と考えられるがその性格は不明である。出土遺物からこの堂宇は鎌倉時代から室町時代末期まで営まれていたとみられる。建物は一度建て替えが行われているが，どの時期で行われたかは不明である。

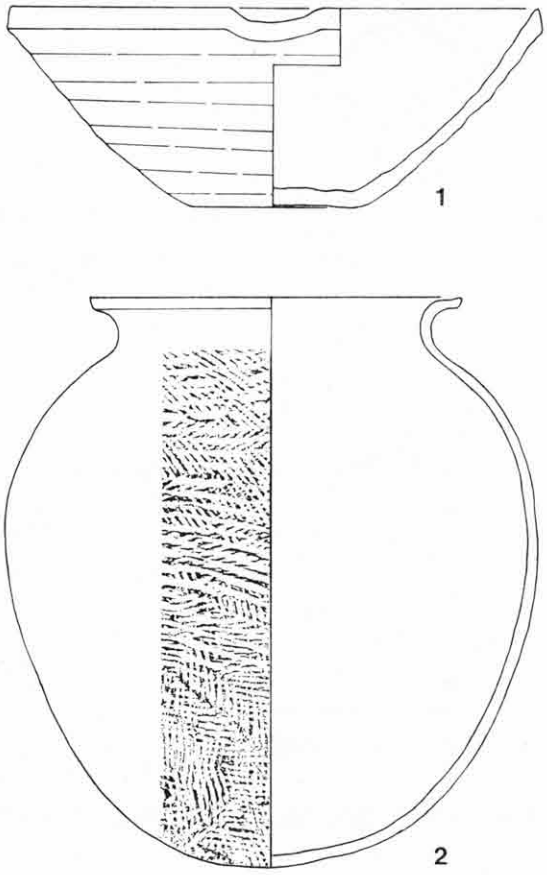
建物跡に近接して営まれた古墓群は鎌倉時代から室町時代前半のもので，中でも南北朝時代に隆盛を極めたものと推定する。

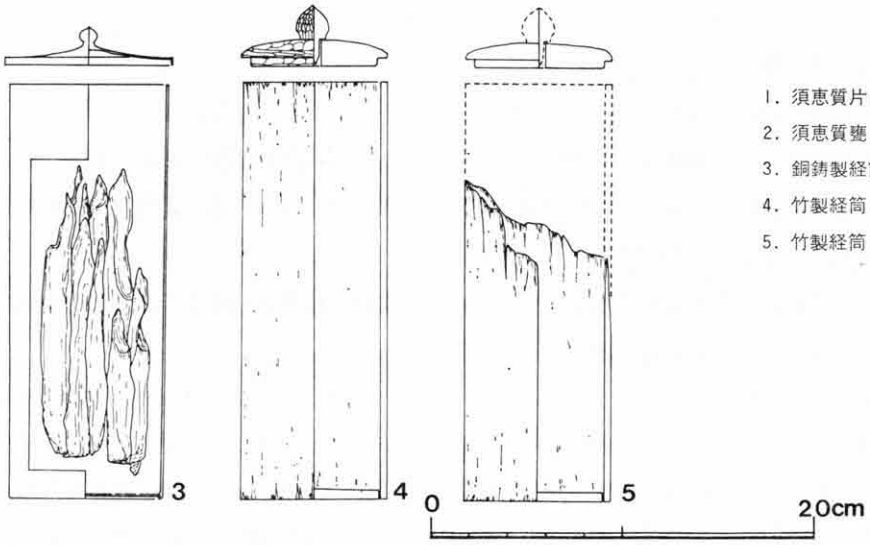
経塚は，末法思想に基づく仏教遺跡と考えられている。釈尊入滅後，正法(1000年)・像法（1000年）を経た後は末法の世(注2)とされ，釈尊の教法がことごとく衰滅するといった思想である。この末法の後，釈尊入滅後56億7000万年後に弥勒菩薩が第2の釈尊として再生，龍下樹下で説法し，衆生を済度するとされた。経塚はこの弥勒菩薩出現に備えるために営まれたと考えられている。



第6図　経塚出土遺物

1．銅鋳製経筒
2．竹製経筒
3．経巻





1．須恵質片口鉢
2．須恵質甕
3．銅鋳製経筒
4．竹製経筒
5．竹製経筒

第7図　経　塚　出　土　遺　物

経筒外容器の蓋に使用された片口鉢は，播磨の神出古窯系とみられ，13世紀初頭に比定される。和鏡及び銅鋳製経筒蓋の宝珠形つまみは平安時代的でもあることから，この経塚の造営された時期は鎌倉時代初頭と考えて大過なかろう。

以上中世寺院に関連する遺構の年代を推定してきたが，この寺院跡がどのような寺院であったかを若干推察してみたい。

威光寺文書によれば「今安寺」の記述がみられ(注3)，今安地区の調査地周辺に「今安寺」の存在が推定されるが，今回検出の寺院跡が「今安寺」と立証する具体的な資料はなかった。しかし，今後整理が進むにつれ，より明瞭になることと期待され，整理の結果によって「今安寺」と同定しえる可能性も残っている。

（竹原一彦＝当センター調査課調査員）

注1　奈良国立博物館『経塚遺宝』(昭和52年)
注2　末法初年は永承7年（1052年）
注3　福知山市史編さん室『福知山市史』史料編Ⅰ（昭和53年）に
「…兵火の為天文4年冬10月，今安・威徳焼亡す…」
「天正7年…此節今安寺内・威徳寺内潰申候…」とある。

篠・西長尾窯跡発掘調査概要

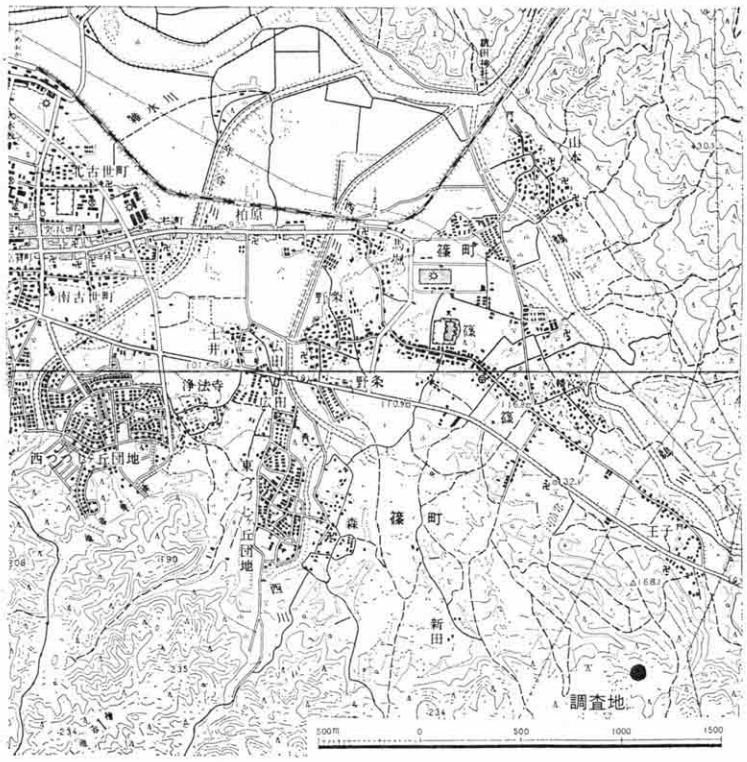
石井清司

1. はじめに

亀岡市篠町に所在する篠窯跡群は昭和51年度より発掘調査が開始され，52年度前山1号窯，53年度黒岩1号窯，54年度小柳1～3号窯，55年度小柳4号窯，前山2・3号窯，鍋倉第4窯跡1号窯，芦原1号窯の総計10基の窯跡を調査した。

各窯跡は9世紀～10世紀に操業され，特に黒岩1号窯，前山2・3号窯は平面三角形状の特異な窯体構造を呈し，窯体及び灰原内に緑釉陶器を多く含み，同じ窯体構造をなす小柳4号窯とともに注目されている。

本年度は昭和53年度西長尾F地区の試掘調査により確認された4基（西長尾1～4号窯）の窯跡を調査対象とし，各窯跡の窯体構造・操業年代等を検討するため発掘調査を行ったものである。なお，調査が進むにつれ，前述の1～4号窯のほかに，新たに2基の窯が



第1図　調査地位置図

確認され，総数６基の窯の発掘調査を行った。

2. 調査の経過

西長尾窯跡の発掘調査は，まず，試掘調査で確認された１～４号窯の窯体の主軸方位及び層位関係を確認するため丘陵斜面に直交する形で幅１ｍのトレンチを数か所設定した。そののち調査対象地全域にわたり発掘調査を行った。

調査の結果，１・４号窯は1.5ｍの間隔をおいて隣接し，３号窯は１号窯の北25ｍに立地する半地下式登窯であること，２号窯は遺構の遺存状態が悪く，窯壁については確認できなかったが平窯と思われる。なお２号窯灰原の範囲を確認するため，一部調査地を拡張したところ，新たに２基の窯壁（５号窯・６号窯）を確認し，急拠調査地を拡張し，窯体の平面形態及び灰原の範囲の追求につとめた。

最終の調査対象面積は660㎡，調査は６月４日より始まり，なお，継続中である。

3. 各窯跡の概要

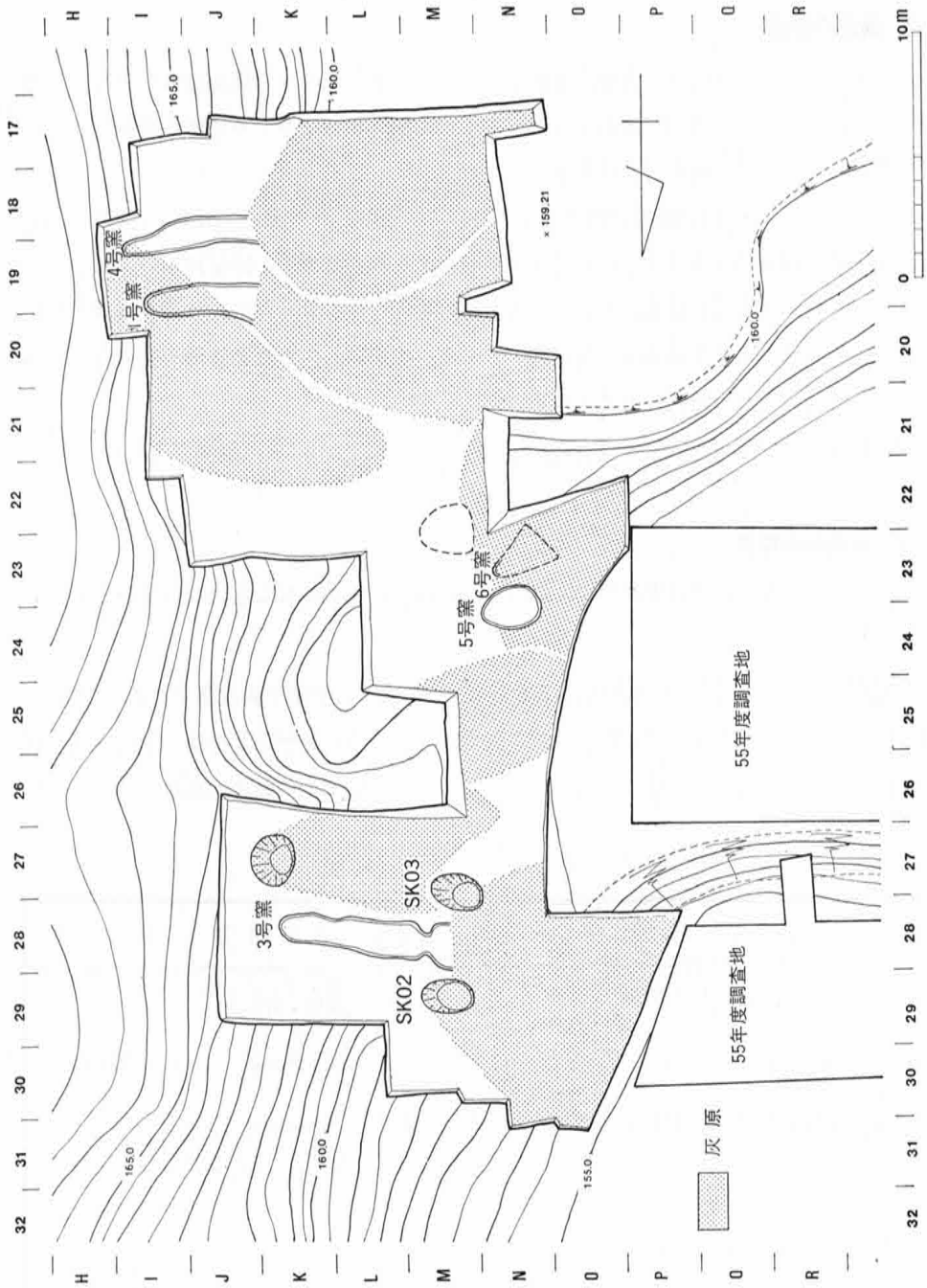
各窯跡の規模・主軸方位等については一覧表に譲り，特徴的なことについてのみ列記する。

１号窯　１号窯は４号窯と1.5ｍの間隔をおいて隣接する半地下式登窯である。現状では天井部は崩落し，床面及び側壁の一部を残すのみである。燃焼部及び焼成部床面は須恵質状に堅く焼きしめられ，後述する３・４号窯に比し燃焼効率の良さが窺える。崩落した

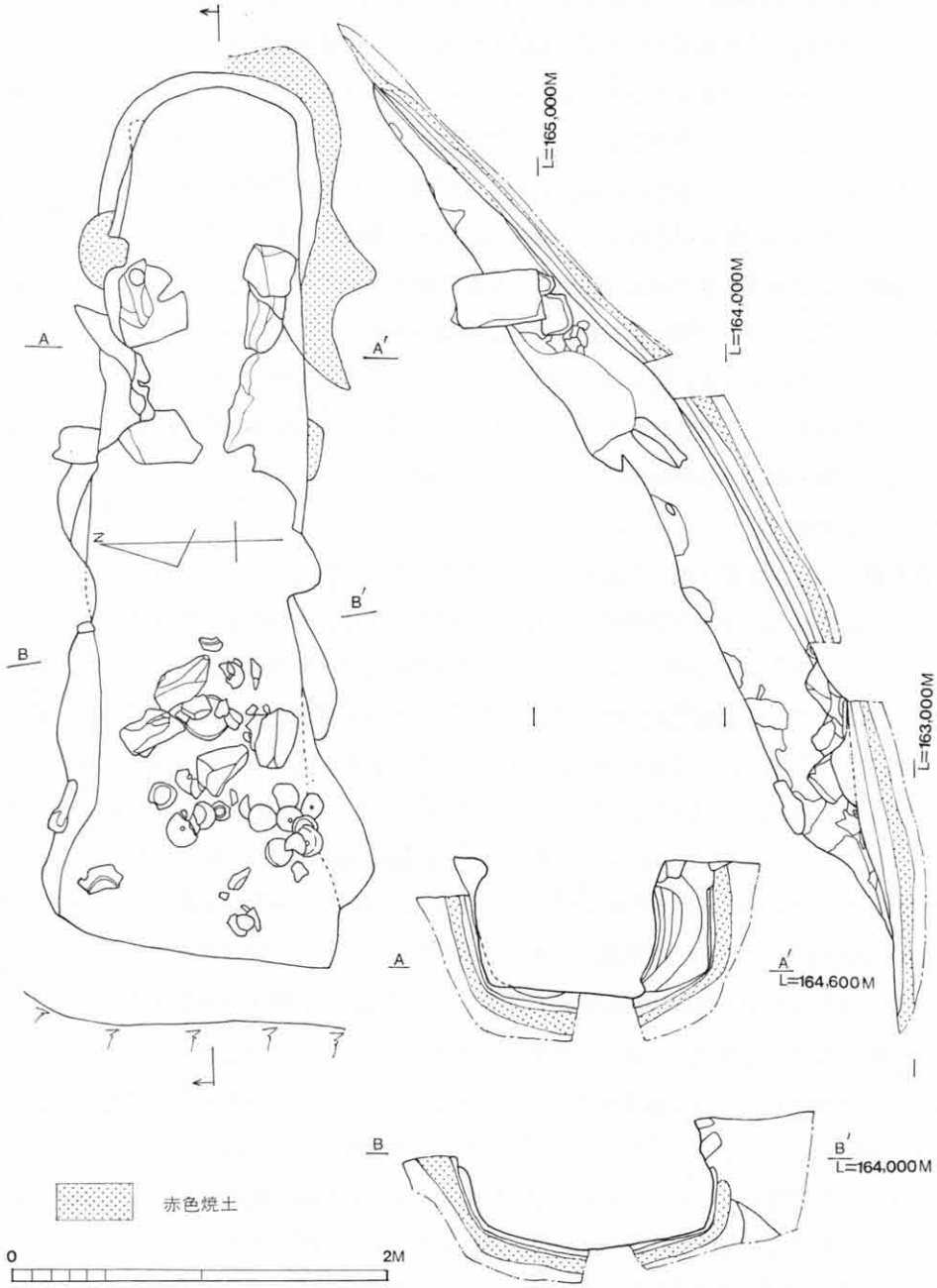
西　長　尾　窯　跡　一　覧　表

	窯体構造	主軸方位	総長(m)	最大幅(m)	床面傾斜角	出土遺物	備考
１号窯	半地下式登窯	S87°E	5.30	1.35	28°	杯・皿・蓋・瓶 平瓶・円面硯	
２号窯	不明	—	—	—	—	埦・鉢・瓶	灰原のみ確認
３号窯	半地下式登窯	S81°E	8.44	1.55	29°	埦・鉢・瓶	
４号窯	半地下式登窯	S82°E	5.79	1.08	30°	杯・皿・蓋・瓶 平瓶	
５号窯	楕円形平窯	—	2.44	1.35	—	埦	
６号窯	三角形平窯	—	—	—	—	—	

※５・６号窯は現在調査中である。



第２図　篠・西長尾窯跡遺構配置図



第3図　西長尾1号窯遺構図

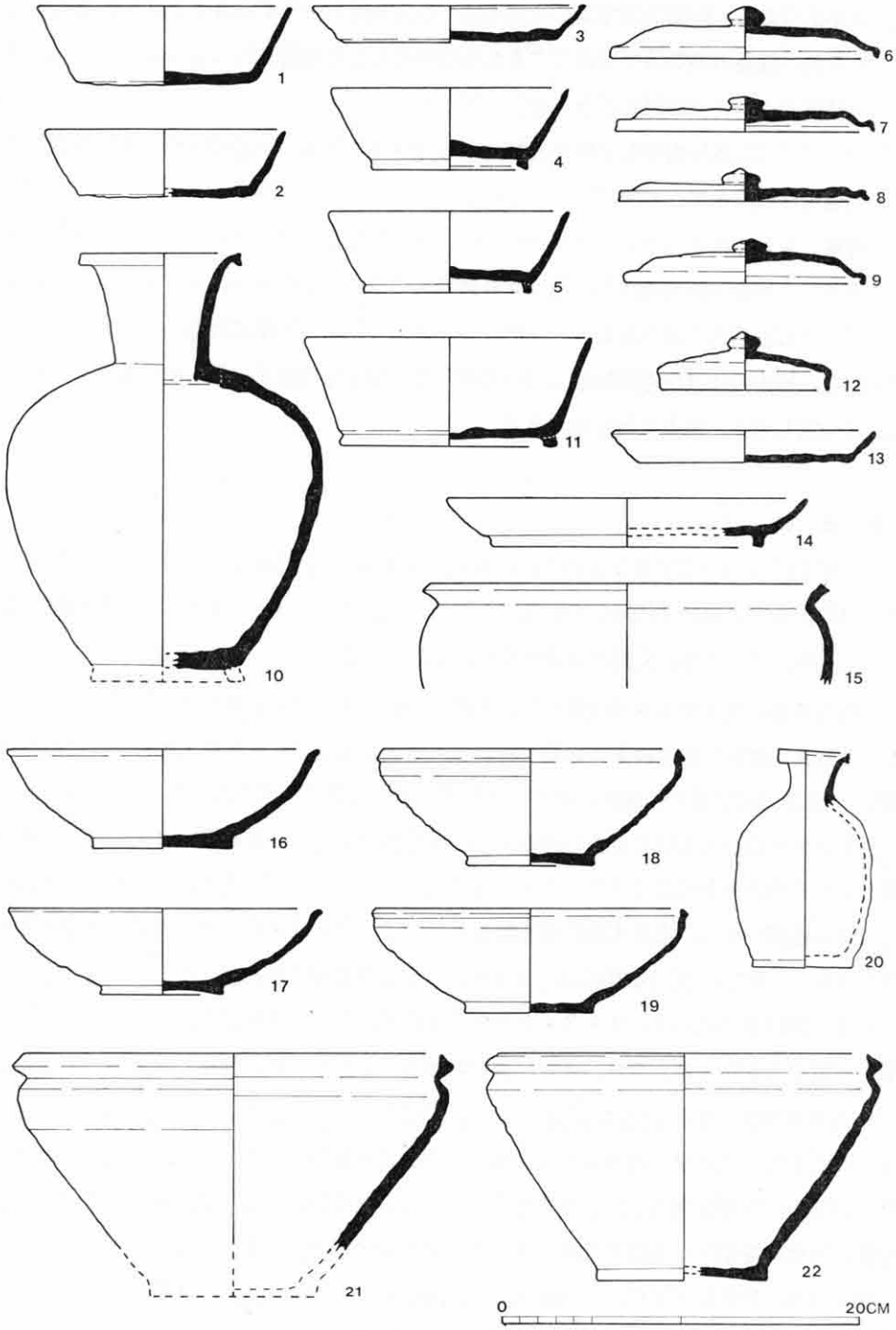
天井部の断面観察では4回以上の窯壁の補修作業が認められる。焚口部は1.5mと3号窯に比して狭く，南に隣接する4号窯灰原が1号窯の焚口部近くまで堆積し，4号窯の操業に際し，1号窯焚口部が削平されたものと思われる。灰原は東西10m・南北15mの範囲で広がる。なお，1号窯灰原は2号窯灰原に切られ，4号窯灰原とは砂・粘土のほか，植物遺体（松葉・ヒシの実等）を含む間層によって隔てられ，1号窯の操業が終了したのち一時期湿地帯であったことが窺える。出土遺物としては焚口部床面に杯・皿・蓋が完形品も含め28点以上を数え，他に灰原内より平瓶・円面硯・二面硯なども出土した。

2号窯　2号窯は1号窯の北西12mの平坦地に構築された窯である。しかし，窯体の遺存状態が悪く，窯壁の一部と思われる焼土がほぼ円形にめぐるだけである。窯体内床面と思われる部分では黒岩1号窯で検出した拳大の円形を呈するカマクソが多量に出土した。これらは焼台として使用されたものであろう。灰原は南北5mの範囲で西側斜面に広がる。出土遺物は椀・鉢等の小形品が目だつ。なお，2号窯灰原は1号窯灰原を切り，6号窯窯体の上面をおおう。

3号窯　3号窯は調査地北端に立地する半地下式登窯である。窯体は1・4号窯と同じく天井部は崩落し，床面及び側壁の一部を残すのみである。窯体側壁の断面観察では2～3回の窯壁の補修作業があり，また灰原層の断面観察でも一度窯体内に堆積した焼土・カマクソ・遺物片等を大規模に灰原内に廃棄した層があり，補修作業を裏付けている。焚口部は八の字形に開き，天井部の一部が残存する。焚口部床面は東西2.0m，南北2.0mの範囲で広がり，地山土を盛土し，焚口部平坦面を構築したことが断面観察より窺える。焚口部中軸より南・北各2.0mの位置に東西2m・南北1.5m・深さ0.3mの灰原を埋土とする楕円形土壙（SK02・SK03）がある。これは操業時に焚口部付近に堆積したオキを同土壙内に埋め消したのち，灰を左右に廃棄したものと思われる。灰原は焚口部より斜面下方に向かい南北9m・東西10mの範囲で広がる。出土遺物には椀・瓶・鉢・蓋がある。

4号窯　4号窯は前述のように1号窯の南に近接した半地下式登窯である。1号窯と4号窯の前後関係は1号窯の操業が終了したのち，一部盛土を行い4号窯を構築したことが窯体の断ち割り結果より観察できる。床面及び窯体側壁は1号窯に比し壁面の焼きが甘く，4号窯の燃焼効率は1号窯に比し悪かったものと思われる。焼成部床面から半還元に焼成された杯の完形品3個体が出土した。焚口部は後世の削平を受け，遺存状態は悪い。4号窯は窯壁の断面観察より2～3回の操業回数が考えられる。出土遺物としては，杯・皿・蓋・瓶・平瓶などがある。4号窯は出土遺物より1号窯に近接した時期に操業されたものと思われる。

5号窯　5号窯は丘陵平坦面より斜面に移行する傾斜変換部に構築され，平面楕円形を



第4図　西　長　尾　窯　跡　出　土　遺　物

1号窯窯体内；1～9，1号窯灰原内；10～15，3号窯窯体内，20，
3号窯灰原内；16～19・21・22

呈する平窯である。床面上部では2号窯同様，拳大の円形を呈するカマクソが多量に出土した。これは製品の燃焼効率を良くするための置台として使用されたものと思われる。焚口部及び床面については現在調査を継続中である。

5号窯は6号窯体を削平して構築され，6号窯→5号窯という前後関係が確認された。出土遺物は底部糸切りの椀に器種が限定できる。

6号窯　6号窯は2号窯灰原を除去した際に検出した平窯である。窯壁の遺存状態は悪く，煙道部窯壁の一部を確認し，他は5号窯構築の際に削平をうけ，掘方を検出するのみである。煙道部窯壁の立ちあがり及び掘方の形態より黒岩1号窯に近似した「三角窯」と思われる。掘方内には灰原が堆積しでいるが，これは5号窯操業に際し堆積したものである。6号窯も現在，調査を継続中である。

ま と め

ここで今回の調査成果をまとめると，西長尾1・3・4号窯は丘陵の西側斜面（傾斜角30°～40°）の自然地形を利用して構築された半地下式登窯，2・5・6号窯は丘陵裾部平坦面より斜面に続く傾斜変換点に構築された平窯である。

これら6基の窯は30m四方に集中し，これまでの篠窯跡群の調査例では集中度は高い。これは西長尾窯跡が窯の操業に必要な材料（マキ・粘土など）の確保・地形（水の確保・風向）・立地（消費地との関係）などの各要素に優位な条件を備えたからと思われる。

各窯は窯体及び灰原の切り合い関係より，1号窯→4号窯→6号窯→2・3号窯→5号窯という前後関係が確認できる。1・4号窯出土遺物は杯・皿・蓋のほか瓶・平瓶・硯など多くの種類があり，奈良末の器形を踏襲している。2・3・6号窯出土遺物は椀・鉢・瓶のほか，一部蓋を含むが，器種は限定される。5号窯は椀のみ出土した。出土遺物より1・4号窯は9世紀前半，2・3・6号窯は9世紀後半～10世紀前半，5号窯は10世紀後半を前後する時期と考えられ，今後，遺物の整理が進むにつれ，詳細に検討していきたい。

窯の平面形態では5号窯は楕円形を呈し，6号窯の「三角窯」とともに特異な形態をなす。これまで「三角窯」は黒岩1号窯に代表される緑釉生産のための二次焼成窯と考えられていたが，昨年度調査した小柳4号窯でも，西長尾6号窯とともに緑釉陶器を含まず，今後，再検討を要すると思われる。5号窯は10世紀後半の窯と考えられ，平安京内などの消費地では，10世紀後半以降，須恵器の消費が激減し，土師器・瓦器が主体をしめる。須恵器生産も消費地の供給に対応して，半地下式登窯から，小形器で大量生産を必要とせず，材料が最少限におさえられる平窯に変化したものと思われる。

（石井清司＝当センター調査課調査員）

千代川遺跡発掘調査概要

村尾政人

はじめに

亀岡盆地はなだらかにつづく丹波山地に囲まれ，丹波の最南部に位置し，古生界や花崗岩の山地が河岸段丘を形成する断層盆地である。盆地中央を大堰川が流れ，広く水田地帯が展開しており，水田の畦筋にはハゼやハンノキなどのはさ木がみられるなど，亀岡盆地特有の景観を呈している。

調査地は，西方から東方に向って緩やかに傾斜する舌状台地上にあり，弥生時代から奈良，平安時代の遺物が多く散布し，台地上からは丹波国府推定地を一望におさめることができる。また近接する湯井集落の台地には，弥生時代の遺物が広範囲に散布し集落跡が予想される湯井遺跡があり，その東方に薄い板状の割石を用いた横穴式石室を有する丸塚古墳，丸塚西古墳や，調査地の西山麓には巨石を用いた横穴式石室を有する北ノ庄古墳，また北山麓に拝田古墳群などがある。その中でも特に注目すべきものに拝田16号墳がある。板状割石を使用したドーム型の横穴式石室を有し石棚を持つこの古墳は，千代川町付近では唯一の前方後円墳である。

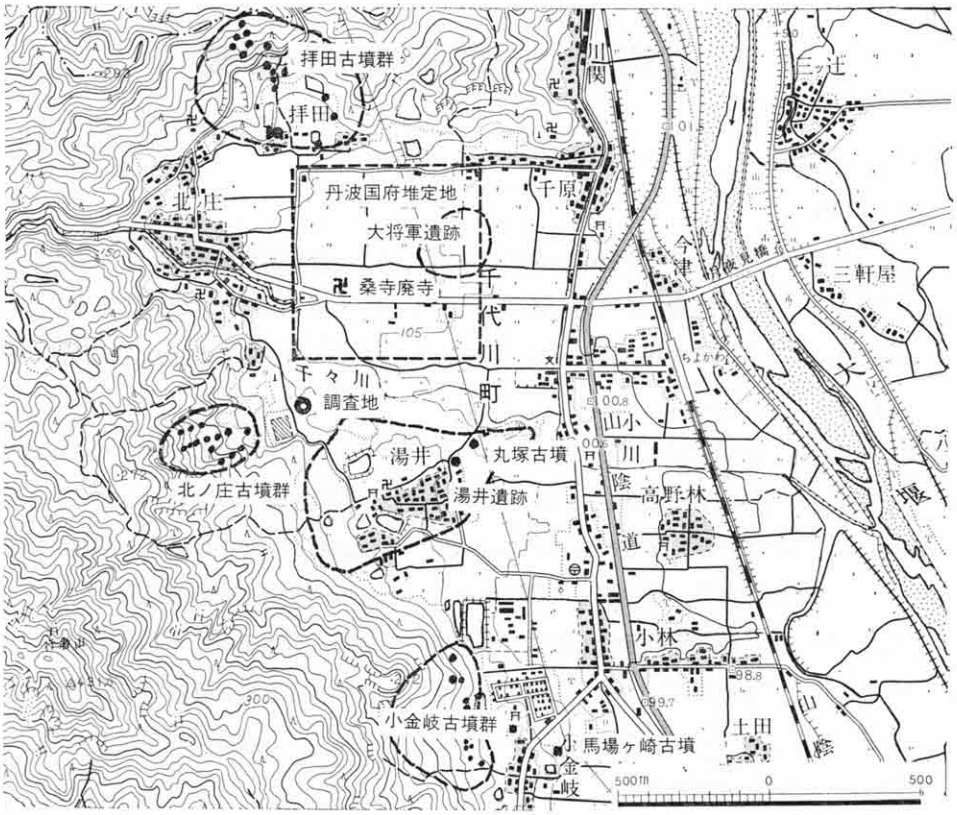
昭和49年２月に『一般国道９号改築事業の整備計画』が発表され，京都府教育委員会は建設省京都国道工事事務所の依頼により昭和48年８月～９月と昭和49年７月に分布調査を行い，さらに昭和50年度から実施した善願寺遺跡，小金岐古墳群の発掘調査を最初として，篠窯跡群，条里制遺構の調査にいたっている。

千代川遺跡は第１次の試掘調査を昭和55年度に京都府教育委員会によって実施され，昭和56年度より第２次調査を京都府埋蔵文化財調査研究センターが引き継いで実施している。

調査概要

千代川遺跡の発掘調査は，亀岡市千代川町北ノ庄地区を対象として，昭和56年５月６日から同年７月31日まで実施した。調査の範囲は，北ノ庄から拝田にかけての総延長975mであり，道路予定路線内の70m幅に限られていたため，約100㎡の試掘溝を設け調査を行った。地区割は，75m四方を大地区としてＡからＭの13地区に分け，さらに小地区として３m四方の方眼に区画し，南西隅の杭を基準に南北をアルファベット，東西を数字で地区名を付けた。

調査は，大地区のＡ・Ｂ・Ｄ地区に幅2.5mのトレンチを数本設定し，掘削にかかった。まずＡ地区では，南の谷筋から北側へ３本のトレンチを設定した。調査地は東方へ緩傾斜



第1図　千代川遺跡と周辺の遺跡

する平坦面の少ない谷筋であり，地表に散布する弥生土器片は摩滅した小破片が多かった。トレンチを1.2m程掘り下げたところでは，厚さ約5㎝程度の弥生時代遺物包含層を検出したが，遺構のベースとなる地層は検出されなかった。これらの事から，弥生時代の遺物は，南西方向の丘陵斜面から流出したものではないかと推定した。

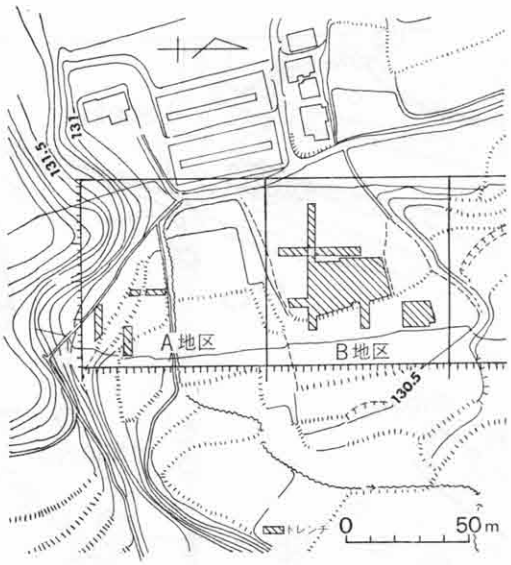
B地区については東側に延び出た舌状台地に位置するため頂部の平坦地に十字形のトレンチと他に数本のトレンチを入れ遺跡の範囲を確認した。

B地区は西側で地山面を切り込んだピット群や土壙を，東側では厚さ約1mの遺物包含層を検出した。その結果，当該地は縄文時代晩期から鎌倉時代に及ぶ複合遺跡であることが判明した。平坦部の東側試掘で奈良・平安時代の溝状遺構・列石遺構・掘立柱建物跡などの遺構を検出したためトレンチを拡張した。

調査地内北東のBS43，BT43地区にて竪穴式住居跡SB0201とそれに伴うと思われる溝状遺構SD0208，土壙状遺構SK0207，他に掘立柱建物跡SB0205を検出した。また西側のトレンチBO38地区とBL36・BH38地区に各1基の竪穴式住居跡などと他に掘立柱建物跡，溝状遺構，土壙状遺構を検出している。以下，各遺構について概要を述べる。

検出遺構

〔ＳＢ0201〕 南北辺が4.5m，東西辺が５ｍの方形住居跡で住居跡内においては，９個の柱穴状ピットを数えるが，まとまりをもつものは確定できなかった。周溝はもたず床面は平坦であり貼床の痕跡も認められなかった。残存する壁は深さ15cm～10cmたらずである。このことは調査地が，舌状台地の緩やかな位置にあるため，段状に区画された水田により削平されたものと考えられる。住居内の土層は黒褐色土層の単一層である。住居内からの出土遺物は布留式土師器が多く須恵器片を一片も含まない。このことから時期的には古墳時代中期に位置するが，短かい時間に使用された住居であると推測した。



第2図 千代川遺跡地区図

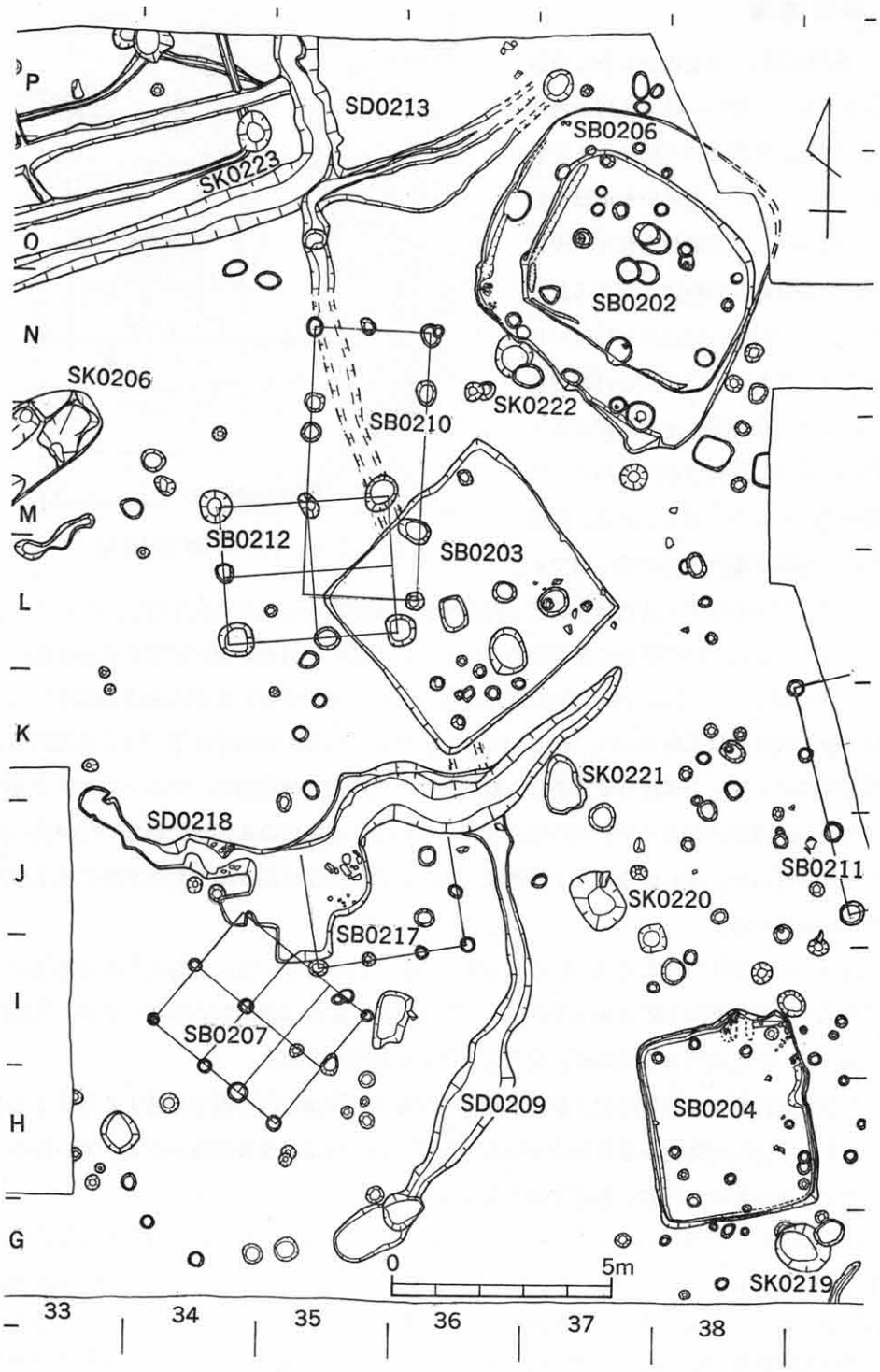
〔ＳＢ0202〕 調査地北東の標高130mに位置し隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西4.5m，南北５ｍ，残存する壁の深さ40cmを測る。周溝は北西壁と西南壁に沿って一部に巡らせてあり，幅約10cm，深さ約５cmを測る。また南東壁では周溝がないが北西壁周溝よりやや深い床面となっている。住居内の床面は北側で約10cm高い床面となっており，いわゆるベット状遺構である。床面は厚さ約６cmを測る黄褐色粘土の貼床を行っている。

住居跡内では柱穴跡と考えられるピットを18個検出したが，主柱と考えられる対角線上に４個ある形式的なものは確認できない。かまど跡，炉跡は確実なものがないが，住居跡中央に２か所と西側より１か所，焼土と多量の炭を検出した。

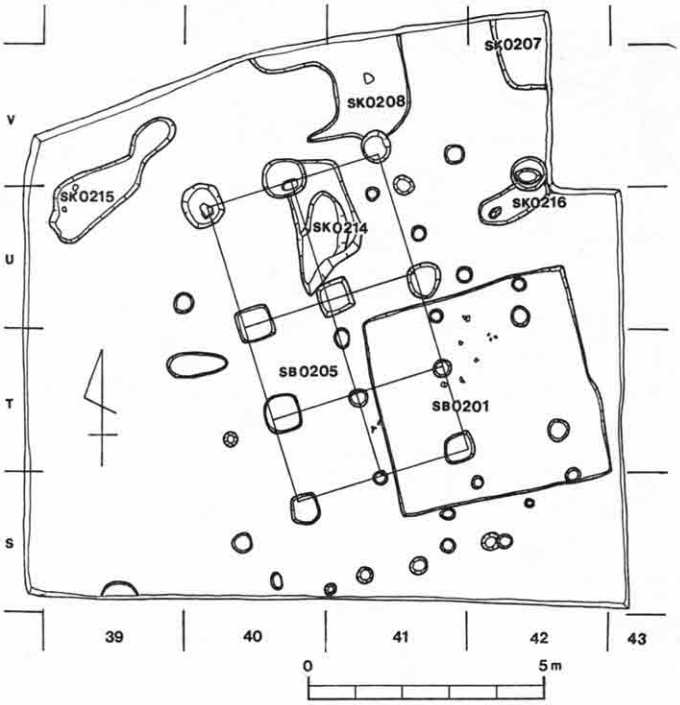
貯蔵穴は南西壁の住居外に１か所あり，径50cm，深さ70cmを測る円形を呈するものである。

出土遺物は住居跡内から多量の土師器を検出した。時期はＳＢ0201より若干古いもので庄内期から布留式併行期であると考えられる。

〔ＳＢ0203〕 ＳＢ0202住居跡と３ｍの間隔をおいて近接し，住居跡の主軸を同方向にふる方形の竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西６ｍ，南北６ｍを測り，住居跡内には周溝はなく，残存する壁は約30cmを測る。住居跡内の土層は黒褐色土層の単一層である。住居床面は貼床でなく地山土である。また柱穴は対角線上に４個ある形式的なものではなく，等間隔に配置をもたない住居跡と考えられる。住居跡内のピットは21個検出している。



第３図　千代川遺跡遺構実測図 (1)



第4図 千代川遺跡遺構実測図(2)

出土遺物は古墳時代中期頃と考えられる布留式土師器である。

〔SB0204〕 調査地の南東端に位置し，本遺跡内ではもっとも小型に属する方形竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西4.5m，南北5m，残存する壁の深さが約35cmを測る。

周溝は壁の下に沿って巡らされており，幅約9cm，深さ10cm～20cmを測る。住居跡床面の貼床は平坦な床面上に約5cmの厚さで黄褐色粘質土を貼っている。柱穴跡と考えられるピットは住居跡内に14個検出したが，これもまた対角線上に4個の柱穴をもつものでない。

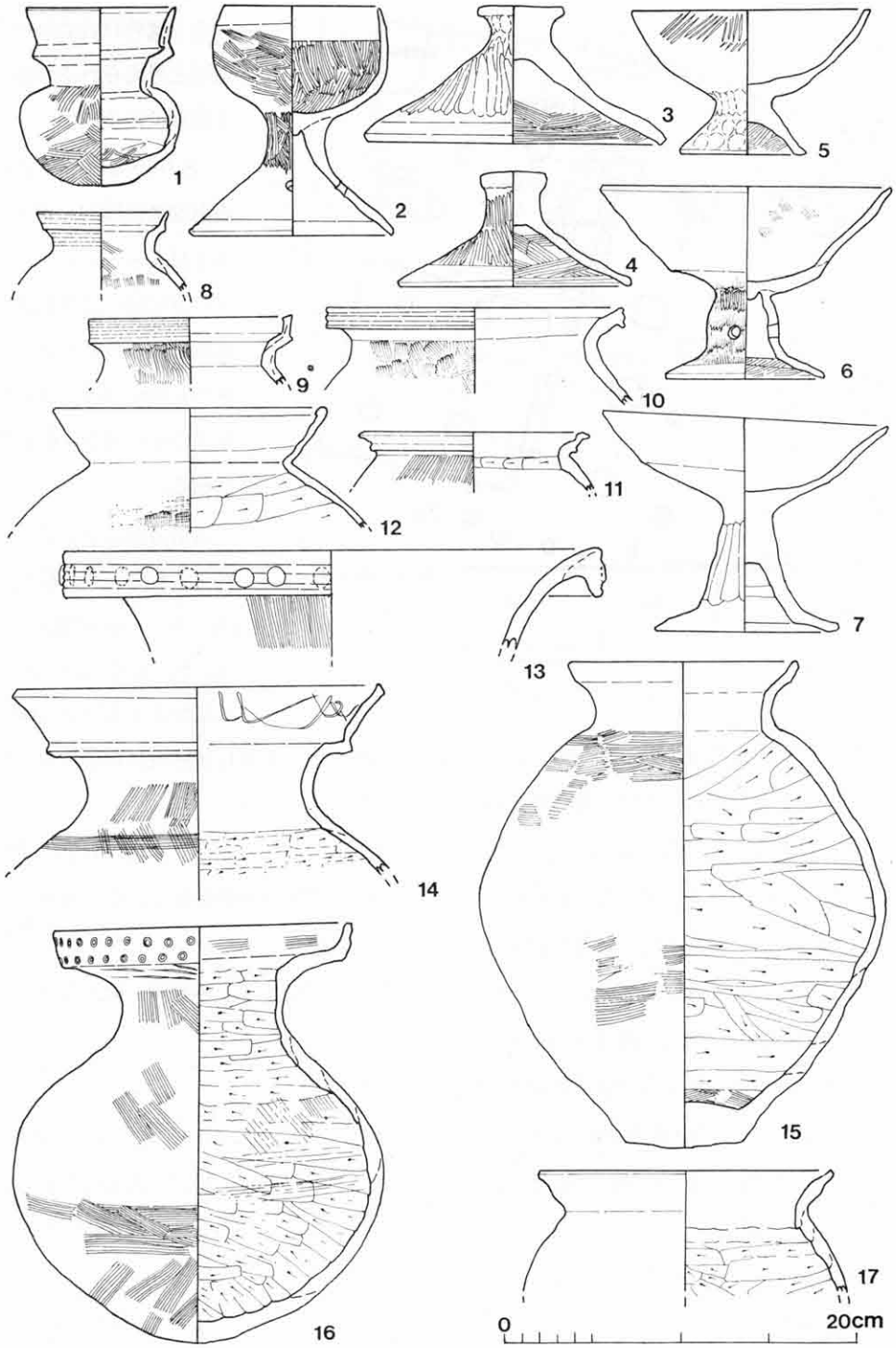
炉跡は検出されなかったが，北辺の東寄りにカマドを検出した。カマドは，粘土で構築されており，住居外に煙出しがある。焚口幅は約30cm，奥行約50cmを測る。またカマド付近では土師器の甕片と甑片が多数散乱した状態で検出された。

出土遺物としては住居跡床面より多数の土師器片，須恵器杯身，杯蓋等を検出した。また住居近辺からは滑石製紡錘車が出土している。

時期は，出土遺物から古墳時代後期と考えられる。

〔SB0205〕 この建物は本遺跡で検出した掘立柱建物跡の中でもっとも大きく，3間×2間で柱間距離は東西1.8m，南北1.7mを測り，主軸は南北方向より若干西側へふるものである。柱穴の大きさは，一辺約50cm×55cmの方形で，深さ20～50cmを測る。柱穴からは約25cm×20cmの礎石状の石を3個検出した。

〔SB0206〕 SB0202の拡張により一回り大きくなった隅丸方形を呈する竪穴式住居跡である。住居跡の大きさは東西7.3m，南北7.0mで北側と南側に幅約5cm，深さ4cmの周溝をもつものである。床面は平坦で貼床をもたず，全体的に若干東側が低い。住居内は



第5図　千代川遺跡出土遺物

黒褐色土層の単一層である。

出土遺物は庄内～布留併行期であると考えられるが，ＳＢ0202と切り合い関係にあるため詳細は将来の検討を必要とする。

ま と め

検出した遺構及び遺物は地区や時期によって質・量に差はあるがおおむね弥生時代後期から古墳時代中期までの時間の中で一旦放棄され，再び古墳時代後期から奈良，平安時代へと続いたものと考えられる。さらに遺物に限ってみると各時期に相当するものが各々認められるが，全体的に古墳時代前・中期の遺物が多く中には布留式以前の庄内併行期に位置づける一群もあるが十分に実体のつかめない時期のことであり今後の検討を必要とするものである。（第５図に示した遺物については１がＳＢ0208，２・５・16がＳＢ0206，それ以外はＳＢ0202よりそれぞれ出土したものである。）

住居跡の主軸は西側へ若干ふるものと，ふらない真北方向に向けるものとに分けられるが，前者が古墳時代前・中期の住居跡で，後者が古墳時代後期と考えられる。また後者のＳＢ0204と前者とは，ＳＤ0218の環溝と考えられる溝により区画されている。

今回の調査では，住居跡平面プランは画一的なものでなく，時期的にも差を認めることができた。しかし，本遺跡の実際の規模はもっと広大で多数の住居跡のあることが推測される。

以上，今回の調査により得られた各時期の成果は当地方の文化を理解する上に貴重な資料を提供するものと言えよう。

（村尾政人＝当センター調査課調査員）

長岡京の条坊

中山修一

1. はじめのことば

故長崎大学教授吉田敬市博士は，「山城乙訓郡乃条里」（京都大学文学部二千六百年記念論文集所載）なる論文の中で，「……。喜田博士は……長岡京の条坊の地割を定むるに旧来の条里地割をそのまま用ひたと述べてゐられる。卓説敬服に値する。……以上の諸点より考察して，長岡京条坊は旧来の条里地割をそのまま利用したもので，条里地割は長岡京建設によって何等実質的変化は認められなかったと思はれる。……故に長岡京旧址が全然その痕跡さへ見られない理由の一は，確かに条坊地割が条里地割そのまま用ひた結果であろうと考へられる。」と述べている。これが昭和20年代前半までの長岡京条坊に関する学界の常識であった。

その後私は戦後のにわか百姓の経験から，長岡京域にも，奈良の平城京や平安京と同じ様な，道路巾を含めて平均七十五間々隔の条坊の遺構が，とくに顕著に右京域に残っていること，左京域においても，現，向日市上植野区の集落内に残っていることを知った。また延暦14年正月29日の太政官符の記事の「近衛の蓮池」の跡と思われる低湿地を発見して，その低湿地を「左京三条一坊十町」とし，それを軸にして，二条大路・三条大路・朱雀大路等を平安京型に復原した。その朱雀大路の延長線上に大極殿を主殿とする朝堂院の中門である，平安京式に呼べば会昌門と呼ばれる門跡を発掘によって確認したのは，昭和30年の1月のことであった。

その後平安遺文第1巻に載せられている右京の六条三坊の10丈×15丈の土地の売買文から，長岡京でも条坊割の単位である1町は40丈四方であり，それを南北に四つ，東西に8つに割っていることを文献的(注1)にも立証できることを知った。

また類聚三代格第十九の太政官符「応に両京喪儀(そうぎ)を僭奢(せんしゃ)することを禁ずべき事」の末尾に「……仍(よ)って在る所の条坊及び要路において，明らかに牓示(ぼうじ)を加えよ。」

の文があるから，たて・よこの町割が厳然と造られ，その中に要路と呼ばれる他の道路よりもりっぱなみちのあることも想像したが，現実にはその道路の実感が湧かず，ことに東西の道路はほぼ七十五間々隔の条坊図にのるが，南北の古い道路らしいと考えられるものが，その条坊復原図にのらないことに頭を悩ませて，早く道路が掘り出せないものかと願っていた。

2. 本　　論

昭和49年7月から12月中旬までの京都府立向陽高等学校の校舎建築の事前調査によって，中山の三条大路と推定した付近に東西方向に通る二本の溝が高橋美久二技師の指導によって掘り出され，その中に詰っていた土器によって，長岡京時代のものに間違いないことが確かめられた。

また平安京型に復原すれば，ほぼ東大宮大路の側溝かと思われるところに，南北方向に走る溝のあることを確認した。その溝は平安京型の東大宮大路のものとすれば，西側溝のものと考えられたが，その溝が三条大路の北側溝とL字型に交っているところから考えると東側溝と考えざるを得ないということに意見が一致した。(注2)(その後の右京の西大宮大路＝西一坊大路及び西二坊大路の発見により，この道は町をたてに割るための道路の溝であることがわかった。)

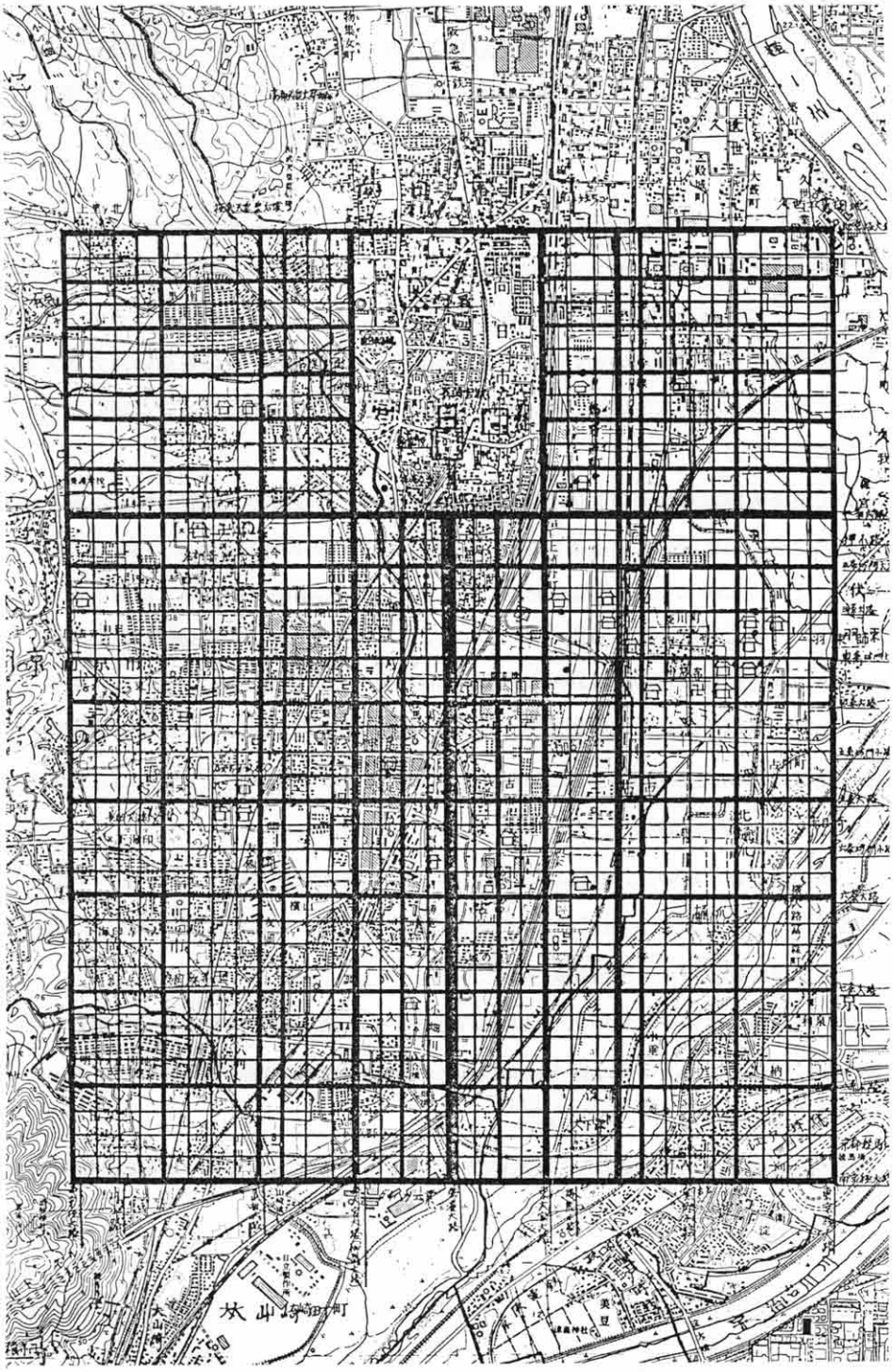
次いで三条大路ならばその北の小路の溝もある筈だというので，調査したら，現在向陽高校の北側を東西に流れている溝の中から，幅1.2mの小路の北溝を，その南に4.3mの道路面を，その南に幅2.4mの南溝を発見した。従ってこの小路（平安京では姉小路と呼ばれている）の幅は両溝の端から数えて7.9mになる。また三条大路の北溝の幅は3.6m，道路面10m，南溝幅1.5m合計15.1～14.7mと計られている。両路とも，これに犬走り二か所と，築地一棟幅を加えたものが道幅となる。なお三条大路北溝の北側と姉小路南溝の南側との間は116.5mしかなくて，たとえ当時の1尺が今のものより，やや短いとしても記録にある大路80尺・小路40尺，町400尺よりはいずれも短い。

ところが仮称姉小路の北，三条坊門小路（平安京の御池通）は幅が意外に広く両溝の外側の距離が25mと延喜式の小路四丈より遙かに広いことが，長岡京市今里地区の外環状線工事に伴う事前調査によって確かめられた。(注3)

また二条大路の北の平安京の名を借れば冷泉小路の北溝と思われる溝も立合調査によって見つかっているので，この小路も溝の外側の間隔を7.9m・町幅を116.5mとすると，二条大路の幅は約39mということになる。(注4)

また長岡京市神足小学校の体育館建替え事前調査によって，朱雀大路中軸線と西大宮大路中軸線の間隔526.9m，その東溝と西溝の外側の間の幅25.6mという数字も明かにされた。(注5)

外環状今里地区の調査で，こんど拡幅されて外環状線になる予定線の下から二本の南北溝を発見したが，遺物を見ると明かに長岡京時代の溝であることが確認された。その幅は両溝の外側で，18m，内側で15.4m，その中心線と朱雀大路の中心線の間隔は1071.4mと



第1図 長　岡　京　条　坊　図

報告されている。(注6)

これらの結果から長岡京の南北の道路間隔は，平安京タイプではなくて平城京タイプであることが明かとなった。平安京タイプというのは，朱雀大路の幅の半分14丈＋町幅40丈＋小路幅４丈＋町幅40丈＋大路幅10丈＋町幅40丈＋小路幅４丈＋町幅40丈＋大宮大路幅の半分６丈＝198丈――第一坊の幅となるのに対して，平城京タイプというのは，朱雀大路幅14丈＋町幅（40丈－10丈）＋小路幅４丈＋町幅（40丈－３丈）＋大路幅10丈＋町幅（40丈－３丈）＋小路幅４丈＋町幅（40丈－２丈）＋大路幅12丈の半分＝180丈――平安京型第一坊の幅と18丈分狭くなる地割のしかたをいう。

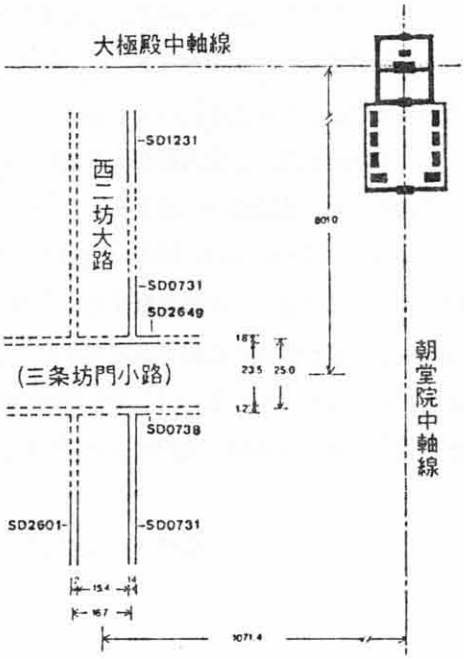
以上は高橋技師の発見であり，京都市埋蔵文化財研究所の梅川光隆調査員も羽束師小学校・神川中学校々舎建設の事前調査において，それに近い発言をしている。(注7)

長岡京のたての条坊の地割が平城京タイプであるとすれば，二条大路以北もまた同じ原則で地割されたであろう。

平城京では二条大路の道路面北端と南第一門の中心との距離247m，第一門と第二門・第二門と第三門との中心距離266m，第三門中心と一条大路北端との距離252mとなっている。

長岡京においても同じように当てはめてみると，仮称冷泉小路・仮称近衛大路の発掘によって知られた溝がよく線にのる。ただし平城京の一条大路はここでは仮称土御門大路となり平城京右京北辺坊の北京極（一条大路）にあたる通りの一本北にまだ東西の溝が知られている。

しかもその溝は東西に一直線に連なるのではなくて，猪熊通（長岡京においても猪熊通りの名はすでにあったと思われる）の東溝との交差点においてすんなりと連なり，Ｌ字型に北に曲がりまだ北へ延びていく。仮に今一町分が北にあり，その北の道をに仮北京極とすると，宮城の東の町数は12町となる。平安京の10町，平城京の左京の８町に比べると南北に２～４町多く並ぶことになる。これは都の南東部に桂川が引っかかり，また南西は山地となり，宮城の西北部が丘陵にかかるため



第２図　外環状線に伴う発掘調査検出の長岡京条坊遺構概念図

に，その分だけ北へ延伸したのではないかと思われる。

三条大路から一本南の道もほぼ広さは8m前後であり，その道と三条大路の間も116.5mとなるようである。(注8) それから南はどのようになるかは，まだ発掘によっては確かめられていないが，どうも延喜式に述べられているように，大路8丈（24m）小路4丈（12m）とはかならずしもなっていないようである。

どうも四条・五条付近の物指しは，今の曲(かね)尺10尺＝3.03mに近く，北と南では昔の10尺は今の曲尺の10尺よりは少し短い（10尺＝2.976m位）ように思われる。また大路8丈・小路4丈・町幅40丈としたかどうかも仮称六角通以南ではわからない。

また南北の溝も次々と測定され，西大宮大路(注9)・西二坊大路（仮称道租大路(注10)）の位置が，朱雀大路から180丈・360丈西にあることが明かになった。

また猪熊小路や平安京の堀川小路に比定される小路の幅も測られたが，座標の示す通り延喜式より大分狭く，また町幅も116.5mとなっている。そうなると平安京ならば堀川通の東にあたる油小路通が案外広くてほぼ二坊大路と同じ位の広さになるのではなかろうか。三坊・四坊の大路・小路については，東三坊大路側溝のほかは，まだほとんど資料が発見されていない。取り敢えずわからぬ部分は延喜式にのっとって線をひいてみた。

3. 終りのことば

発見された溝の座標が山中章技師の手で集められ，整頓されている。高橋美久二技師は25mも幅のあった，中山が三条坊門小路とした道を二条大路と考え，南端は中山の九条通と一致するという考えを述べている。(注11)

また吉本昌弘氏も二条大路を二本南に下げる点では高橋氏と同じであるが，南京極も従って従前より二本南に下げようとしている。(注12)

ただ北京極については，従来の一条通りをこれにあて，従って二条以北を12町とした点は中山と同じである。ただ北京極の位置は二本南においている。また新四条通りすなわち長岡京市役所前の通りの幅を8丈ではなくて17丈とし，その東の延長線が東海・東山・北陸道に通じるとしている。同じ発掘資料をもとにして色々意見が出されることは有難いことである。終りにあたり発掘による資料の提供者ならびに多くの方々の学恩に対し感謝のを表したい。

（中山修一＝京都文教短期大学教授，長岡京跡発掘調査研究所長）

長岡京跡検出条坊関連遺構一覧表

No.	次数	調査地	国土座標 X座標	国土座標 Y座標	国土座標 標高	方向	方位角	遺構No.	備考
1			−117,542.57	−26,840.28	32.06			基 4	朝堂院中軸線(大極殿正面階段中央)
			−117,493.39	−26,840.39	32.09			基 5	〃 (小安殿背面階段中央)
2			−117,503.82	−26,651.55	23.19			基 12	内裏回廊東
			−117,456.64	−26,650.88	23.07			基 13	内裏回廊東北隅
			−117,456.64	−26,575.22					内裏中軸線
3	L 2	7ANFNT	−118,469.1	−26,255.1		南北	N0°1′43″E	SD51 北部N	
			−118,473.4	−26,255.0	15.40	〃	(L.2.SD55)	〃 〃 S	
4			−118,495.2	−26,254.3		〃		SD51 中部N	
			−118,511.5	−26,254.1	15.21	〃		〃 〃 S	
5			−118,571.2	−26,255.8		〃	N0°1′43″E	SD55 北部N	
			−118,574.8	−26,255.4		〃	(L.2.SD51)	〃 〃 S	
6			−118,595.3	−26,220.4		東西	E0°10′16″N	SD52 W	三条北
			−118,595.2	−26,216.9		〃	(L.9.SD04)	〃 E	
7			−118,607.7	−26,220.7	15.61	〃	E0°7′02″S	SD54 W	三条南
			−118,607.8	−26,217.0	15.52	〃	(L.9.SD03)	〃 E	

No.	次数	調査地	国土座標			方向	方位角	遺構No.	備考
			X座標	Y座標	標高				
8			−118,475.9	−26,220.7	15.56	東西		SD66 西部W	姉 南側溝
			−118,475.9	−26,218.4	15.56	〃		〃 〃 E	〃 〃
9			−118,475.5	−26,168.7	15.25	〃	E0°1′20″N	SD66 東部W	〃 〃
			−118,475.5	−26,168.3	15.23	〃	(R.37. SD3703)	〃 〃 E	〃 〃
10	L 9	7ANXHW	−118,593.4	−25,109.8		〃	E0°10′16″N (L.2. SD52)	SD04(1トレ)	三条北側溝
11			−118,610.8	−25,109.8		〃	E0°7′02″S	SD03E(1トレ)	〃 南 〃
			−118,610.5	−25,137.8		〃	(L.2. SD54)	〃 W(〃)	〃 〃
12			−118,727.4	−25,132.8		〃		SD26(3トレ)	六角 北
13			−118,735.9	−25,154.8		〃		SD27(3トレ)	〃 南
14	L14	7ANEJS	−117,280.0	−26,138.0	13.27	〃		SD1401 西部W	近衛
			−117,280.0	−26,103.1	13.26	〃		〃 〃 E	〃
			−117,280.9	−26,088.8	13.48	〃		〃 東部W	〃
			−117,282.4	−26,047.6	13.30	〃		〃 〃 E	〃
15			−117,283.1	−26,137.6	13.57	〃		SD1412 西部W	
			−117,282.9	−26,116.3	13.54	〃		〃 〃 E	

			−117,282.7	−26,088.8	13.48	〃		〃 東部W	
			−117,282.8	−26,083.9	13.39	〃		〃 〃 E	
16			−117,287.3	−26,135.6	13.51	東西		S D1413W	
			−117,287.6	−26,116.4	13.41	〃		〃 E	
			−117,282.3	−26,136.2	13.27	〃		〃 N	
17			−117,293.4	−26,055.4	13.32	南北	N0°3′55″W	S D1402 中部N	堀川
			−117,296.1	−26,055.5	13.32	〃	(L 22. S D2212)	〃 〃 S	〃
			−117,321.9	−26,055.6	13.27	〃		〃 南部N	〃
			−117,327.2	−26,055.6	13.24	〃		〃 〃 S	〃
18			−117,322.1	−26,046.4	13.32	〃	N0°2′17″W	S D1406 N	〃
	L14	7ANEJS	−117,327.7	−26,046.3	13.22	〃	(L.51. S D5101)	〃 S	〃
19	L22	7ANESHII	−117,869.4	−26,084.5	12.12	東西	E0°11′36″S	S D1301 W	二条二坊六町
			−117,869.4	−26,053.5	12.12	〃	(L.51. S D1301)	〃 E	〃
20			−117,817.4	−26,071.3	12.55	南北		S D2201 N	
			−117,865.0	−26,072.9	12.40	〃		〃 S	
21			−117,866.8	−26,054.5	12.49	〃		S D2211 M	
22			−117,871.8	−26,054.8	12.42	〃	N0°3′55″W (L.14. S D1402)	S D2212 M	

No.	次数	調査地	国土座標 X座標	国土座標 Y座標	国土座標 標高	方向	方位角	遺構No.	備考
23	L41	7ANDKD	−116,572.6	−26,176.0		南北	(L.52. SD5202)	SD4101 N	猪熊
			−116,595.0	−26,176.5		〃	N0°3′33″W	〃 S	
24			−116,596.2	−26,175.0		東西		SD4101 W	
			−116,596.8	−26,160.0		〃		〃 E	
25	L43	7ANFKMⅡ	−118,978.0	−26,212.0		南北		SD4301 N	
			−118,982.5	−26,212.0		〃		〃 S	
26			−118,971.5	−26,195.5		〃		SD4302 N	
			−118,981.5	−26,195.5		〃		〃 S	
27			−118,971.2	−26,191.0		〃		SD4303 N	
			−118,980.6	−26,191.0		〃		〃 S	
28			−118,970.7	−26,180.7		〃		SD4304 N	猪熊
			−118,979.6	−26,180.7		〃		〃 S	
29			−118,970.5	−26,178.5		〃		SD4305 N	
			−118,979.3	−26,178.5		〃		〃 S	
30	L51	7ANESHⅣ	−117,869.5	−26,053		東西	E0°11′36″S	SD1301 W	
			−117,869.5	−26,043		〃	(L.22. SD1301)	〃 E	

31			−117,869.8 −117,882.5	−26,046.0 −26,046.0		南北 〃	N0°2′17″W (L.14. S D1406)	S D5101 N 〃 S	堀川 〃
32			−117,845.4 −117,877.3	−26,047.2 −26,047.2		南北 〃		S D5102 N 〃 S	堀川 〃
33			−117,869.5 −117,864.1	−26,046.0 −26,046.0		〃 〃		S D5105 N 〃 S	
34	L52	7ANEKS	−118,025	−26,178.5		〃		S D5201	猪熊
35			−118,025	−26,174.5		〃	N0°3′33″W (L.41. S D4101)	S D5202	〃
36	L53	7ANMSB	−120,111.5 −120,111.5	−26,154.6 −26,160.0		東西 〃		S D5301 E 〃 W	
37			−120,160.0 −120,180.4	−26,090.5 −26,090.5		南北 〃		S D5313 N 〃 S	
38	L59	7ANXTT他	−118,906.3	−25,229.1		〃		S D2(D区)	東洞院
39			−118,895.5	−25,104.2		〃		S D1(C区)	高倉
40	L62	7ANWKE	−118,320.9 −118,345.6	−24,799.1 −24,800.2		東西 〃	E0°3′34″S (R.7. S D0738)		三条坊門 〃

No.	次数	調査地	国土座標 X座標	国土座標 Y座標	国土座標 標高	方向	方位角	遺構No.	備考
41	L69	7ANFKMⅣ	−118,988.5	−26,186.5		南北		SD6901 N	猪熊
			−118,991.0	−26,186.5		〃		〃 S	
42			−118,989.5	−26,191.7		〃		SD6902 N	〃
			−118,991.5	−26,191.7		〃		〃 S	
43	R 7	7ANITT・IST	−118,138.0	−27,910.5	27.96			SD0707	
44			−118,346.5	−27,895.3	25.99	南北	N0°7′31″E	SD0731 N	道祖
			−118,450.5	−27,895.5	26.21	〃	(R.26. SD0731)	〃 S	〃
45			−118,342.4	−27,893.6	25.95	東西	E0°3′34″S (L.64.)	SD0738	三条坊門（南）
46	R10	7ANMMBI	−120,036.0	−26,867.0		南北	0°0′0″	SD1036 N	朱雀西
			−120,043.0	−26,867.0		〃	(R.65. SD1036)	〃 S	〃
47			−120,032.0	−26,853.6		〃		SD1037 N	
			−120,053.5	−26,853.6		〃		〃 S	
48	R11	7ANKUTI	−119,681.6	−27,695.3		東西		SD1109 E	五条
			−119,681.6	−27,703.5		〃		〃 W	〃

49	R26	7ANITT・IST	−118,317.4	−27,893.6		〃		SD2649	三条坊門（北）
50			−118,450.5	−27,912.2		南北		SD2601	西二坊（西）
51	R37	7ANINE	−118,476.1 −118,476.1	−27,493.5 −27,487.8	22.88	東西 〃	E0°1″20 (L.2.SD66)	SD3703 W 〃 E	姉南 〃
52	R39	7ANQMK	−120,815.6 −120,814.4	−27,211.6 −27,218.5		〃 〃		SD3912 E 〃 W	七条・塩の中間 〃
53	R65	7ANMMBⅢ	−119,898.5 −119,906.0	−26,867.0 −26,867.0		南北 〃	0°0′00″ (R.10.SD1036)	SD1036 N 〃 S	朱雀西 〃
54	R66	7ANMSA	−119,522.5 −119,522.5	−27,185.1 −27,197.7		東西 〃		SD6603 E 〃 W	
55	7947	7ANFZN	−118,040	−26,128.9 ※		南北		SD79471	※西肩
56	8018	7ANEKS	−117,920.7	−26,177.8		〃		SD5201	猪熊
57			−117,920.7	−26,173.5		〃		SD5202	〃
58			−117,923.3	−26,235.5		東西		SD801801	冷泉

No.	次数	調査地	国土座標			方向	方位角	遺構No.	備考
			X座標	Y座標	標高				
	R77	7ANKSM	−119,769.6	−27,348.8	17.05	南北		SD2701	西一坊大路（北）
			−119,803.8	−27,349.75	16.749	〃		〃	〃（南）

注1　次数のLは左京Rは右京の略。
注2　No. 10〜13, 38〜40 の国土座標は（財）京都市埋蔵文化財研究所の資料提供による。

注1　田村圓澄氏に平安遺文に長岡京関係の売買文書のあることを教えられた。
注2　平良泰久「長岡宮跡昭和49年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1975）
注3　高橋美久二他「長岡京跡右京第26次発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-2）』1980）
注4　立合調査で確認，しかし東西に長く続くが，やゝ不鮮明な所もある。
注5　「神足小学校体育館建設に伴う発掘調査（長岡京跡右京第77次＜7ANKSM地区＞調査）現地説明会資料」長岡京市教育委員会 1981
注6　注3に同じ。
注7　中山修一・平尾政幸・梅川光隆「長岡京跡発掘調査報告」（『京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅱ』1978）
注8　注7に同じ。
注9　注5と同じプリントによる。
注10　注3に同じ。
注11　注3に同じ。
注12「長岡京ニュース第20冊」長岡京跡発掘調査研究所 1981

「銅出徐州」の徐州

―― 考古資料ノート ① ――

福山敏男

今年8月，『考古』1981年第4期が送られてきて，王仲殊「関于日本三角縁神獣鏡的問題」が目にとまり，すぐにていねいに一読した。日本の研究家の諸説を土台にして書かれた論文で，よく勉強しての執筆であることは解るが，今まで舶載品と考えられていた三角縁神獣鏡は，魏または呉で作ったものではなく，東渡した中国の工匠，特に呉の工匠が日本で作ったものと結論した点には，私は直ちに賛同することはできなかった。

王氏が採りあげた三角縁神獣鏡に関する諸問題のうち，河内国茶臼山古墳出土の神獣鏡の銘文に「銅出徐州，師出洛陽」と記しあることに疑問を示されている点が注目される。ここでまずは前半の「銅出徐州」の徐州について考えてみよう。

一口に徐州といっても，広狭二義がある。『尚書』の「禹貢」に冀・兗・青・徐・揚・荊・豫・梁・雍と数える九州の一つとして徐州をあげ，東は海，北は泰山，南は淮水に至る地域としている。今日の山東省南部から江蘇省北半，安徽省東北部を占める広い土地である。これは広義の徐州である。

「禹貢」の成立年代については春秋時代または戦国時代とする説もあり，辛樹幟『禹貢新解』（1973年版）は西周の盛期で穆王（前10世紀前半）以前の作とする説を出している。しかし司馬遷をはじめ，古くは夏代（禹の時代）の書としていた。

『周礼』の夏官，職方氏の条に，九州の国として揚・荊・豫・青・兗・雍・幽・冀・并の各州をあげている。これを「禹貢」の九州と比較すると，徐・梁の二州がなく，幽・并の二州が加わっている。そのうち青州の説明として，その山鎮を沂山，その沢藪を望諸，その川を淮・泗，その浸を沂・沭というと記してある。沭・沂・泗・淮の諸水の流域は「禹貢」でいう徐州の地に相当する。つまり(1)『周礼』の青州は「禹貢」の徐州と同地域か，または(2)「禹貢」の青・徐二州を合併したものということになろう。漢代以来，(2)の青・徐二州合併説を採った例として，『漢書』地理志上に，周では禹の徐・梁二州を雍・青二州に合せたと記し，『宋書』州郡志一に，周では徐州を青州に合せたと記すのが注意される。諸州の分合のことを記した先秦の詳しい史料があったわけではなく，『漢書』の作者班固が「禹貢」と『周礼』を比較して考え出した説であろう。陳の顧野王の『輿地志』

（『初学記』巻八所引）や『晋書』地理志上では，周の成王の時，周公が「禹貢」の九州を改め，徐・梁を青・雍に併合したと記し，その併合の時期までも明示している。成王の時，周公が『周礼』を作ったという説が既に前漢時代からあったから，それを採り入れ，周公が徐州を青州に併合したという話を作ったのである。

斉の宣王の9年（前324），同王は魏の襄王と徐州で会し，その翌年，楚は斉の徐州を攻囲した（『史記』田敬仲完世家）。この徐州は漢代の魯国薛県に当たるという（『後漢書』郡国志二，豫州，魯国）。薛は今の山東省滕県西南の故薛城とされる。これは狭義の徐州の古い例である。

秦の始皇帝はその26年（前221）に天下を統一して36郡に分け，郡県制をしいた（『史記』秦始皇本紀）。『史記集解』に列挙する36郡（実は内史と35郡）のうち泗水・薛・琅邪の3郡あたりが漢の武帝以後の徐州の地とされる（『漢書』地理志上，下，『宋書』州郡志一）。

前漢の武帝は元封5年（前106）に天下に刺史部13州を置き，郡・国を監せしめた（『漢書』武帝紀）。13州の名称は「禹貢」と『周礼』から採った計11州（但し雍州を涼州，梁州を益州と改名して）と南方で交阯，北方で朔方の2刺史を加えたものであった（『漢書』地理志上）。ここに久しく中絶していた広義の「徐州」が行政地区名として再生したわけである。

武帝以降後漢にかけてのころでは，琅邪郡（治東武県）・東海郡（治郯県）・楚国（治彭城県）・泗水国（治浚県）・臨淮郡（治徐県）・広陵国（治広陵県）の3国3郡が徐州に属していた（『漢書』地理志下）。琅邪郡は秦の郡名のままで，位置も変るまいが，秦の泗水郡は漢の高祖が沛郡と改名し，秦の薛郡は漢の高后（恵帝の母）が魯国と改名し，共に後に豫州（徐州の西隣）に入れた。また広陵国は長江北岸の地にあり，その治所広陵県は今の江蘇省揚州市に相当する。つまり秦代と様子が違って，漢代の徐州は地域が南方にずれ，南は長江北岸にまで及んでいたわけである。

後漢末期のころでは，上記の徐州の楚国は彭城国（宣帝は郡とし，和帝は国とする）となり，泗水国は廃され（光武帝のとき），その治下の県は広陵郡に付し，臨淮郡は下邳国（明帝の改名）となり，治所を下邳としていた。これらの郡・国を監する徐州刺史の治所は東海郡郯県にあった。これは主として『後漢書』郡国志二・三によるところであるが，この郡国志の部分は西晋司馬彪の『続漢書』郡国志を転載したものとされている。『初学記』巻八に『続漢書』郡国志によるらしい文があり，「東海国・琅邪国・彭城国・広陵・下邳国，徐州刺史所部也」とあって『後漢書』の文とよく合っている（但し『後漢書』では東海郡・広陵郡とする）。

漢末の徐州刺史の治所となった東海郡郯県は今の山東省郯城県西南とされる。

三国時代になると，漢代以来の13州のうち，魏は9州，呉は揚・荊・交の3州，蜀は益州を領したという（『宋書』州郡志一)。魏の9州の内には当然徐州が入っていたはずである。呉王の孫權は黄竜元年（229)，蜀王の使者に会い，豫・青・徐・幽は呉の領分，兗・冀・并・涼は蜀の領分で，司州（つまり魏の領）は函谷関の内にすることを提言した（『呉志』呉主伝二)。これは当時の実際とは違うのであろうが，徐州あたりは魏と呉の争奪戦が行なわれたところで，お互にその領地と主張したのであろう。徐州の彭城郡については，呉の黄竜元年に楚国と改称し，同じく呉の章帝は旧のように彭城郡と改めている（『宋書』州郡志一)。

この彭城は『太康地記』に拠るらしい『晋書』地理志下の徐州の条には彭城国として最初に記され，『宋書』州郡志一の徐州の条には「魏・晋・宋治彭城」とあり，西晋時代にも彭城国彭城県に徐州の治所があったことがわかる。

西晋（265-316）は魏の後を承け，徐州を領した（『初学記』巻8所引『太康地記』)。その治所については前記の通りである。

西晋末の永嘉元年（307）から永嘉の乱が始まり，同五年（311)，石勒(後に後趙国を創める）の軍が徐州を占領し，間もなく黄河下流域から淮水流域に至る広い地域は，石勒が建てた後趙の領土になり，徐州はその半ばほどが東晋領として残っていた（『宋書』州郡志一)。戦乱を避けて北から東晋領内に流入した人々のために，明帝（322-325）や成帝（325-342）は諸州郡県を長江流域に僑立し，こうして徐州・南徐州・北徐州ができた(『宋書』州郡志一，『晋書』地理志下)。このころから，名称の変更もあって，徐州の性格が複雑化し，実情が解りにくくなる。その劉宋時代（424-479）までの変遷については『宋書』州郡志一に記されており，同時代では南徐州に17郡，徐州に15郡の名称を列挙している。なお永嘉の乱以降の北方からの漢人の移住については王仲犖『魏晋南北朝史』上冊（1979）第五章第二節「北方流民的南下与東晋政府的対策」参照のこと。

東晋の明帝（323-25）のとき僑立された徐州の治所は鍾離（今の安徽省鳳陽県東)，広陵（今の江蘇省揚州市)，京口（今の江蘇省鎮江市）などに移動したようである（『宋書』州郡志一)。

古来の広大な徐州の北部は前記の後趙のほか前燕・後秦・南燕など五胡十六国に数えられる諸国の領内に，その範囲の大小はあれ，入ったようである。その多くは徐州の治所を彭城（今の徐州市）に置いたが，南燕だけは東莞（今の山東省莒県）に置いたという（郭沫若主編『中国史稿地図集』上冊，1979)。北魏や劉宋から後の徐州治所については，ここでは省略しよう。

話を最初にのべた鏡銘の「銅出徐州」にもどそう。この場合，徐州というのは広義にも狭義にも解せられる。徐州の語は古典中の古典といえる『尚書』の「禹貢」から出たもので，語感に壮重さがあり，銘文の格調を高めるのに役立っている。

王氏論文では，はじめ徐州を狭義に解し，その魏代の治所である彭城（今の徐州市）の近くには古来銅を産出しないことを力説し，つとめて鏡銘の「徐州」にけちをつけようとする。しかし，中国遼寧省遼陽市三道壕の後漢末乃至西晋墓から出土した規矩鳥文鏡の銘文「吾作大竟，真是好，同出余州，清且明兮」のうちに「同出余州」(銅出除州のこと）の字句があること（『文物参考資料』1955年第12期）は王氏も注意された通りであるから，わが鏡銘のうちに「徐州」の語が出ても疑うには当たらないわけである。

そうすると，漢・魏・晋代における銅の産地と徐州との関係を立ち入って考えてみる必要が生ずる。その問題について次回に書くつもりである。　(811106)

（福山敏男＝当センター理事長）

昭和56年度発掘調査略報

1. 木津遺跡

大　槻　真　純

所 在 地　京都府相楽郡木津町大字木津小字殿城2

調査期間　昭和56年7月6日～昭和56年7月22日

調査面積　約150㎡

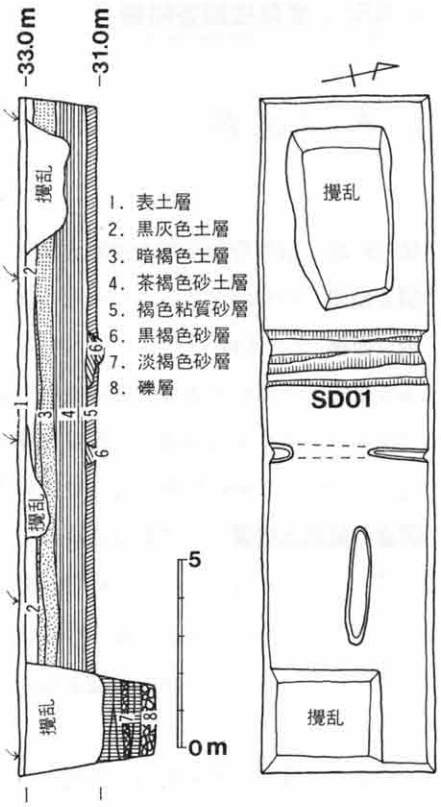
調査目的　京都府木津警察署待機宿舎新築工事に伴う事前調査として，当該地に遺構・遺物があるかどうかを確認し，記録を作成するとともに重要な遺構が確認された場合には，その保存を計るための資料も合わせて作成することを目的として調査を実施した。

調査の経過と概要　木津町は北東方向から流れてきた木津川が，北の方向に大きく向きを変える南岸に位置する。大和・伊賀・歌姫の諸街道が通過するこの地域は，古くから交通の要所を占めてきた所でもある。今回の調査対象となった木津遺跡周辺は，「日本霊異記」に記載されている「泉ノ津」の推定地であり，付近からこれまで数多くの土器片も採集されている。

発掘調査は待機宿舎新築工事予定地を中心にして，4m幅のトレンチを2か所に設定し，トレンチ内に顕著な遺構が検出された場合には周辺部を掘り広げる方法をとった。掘削には機械を使用し，それぞれのトレンチを掘り下げていったのではあったが，どのトレンチ内も攪乱が著しい状況であった。しかし両トレンチとも地表下約1.6m付近において土器片を含む溝および土壙を検出できたことから遺構面と考えられ，その精査を行ったところ，第1トレンチにおいては溝2条・土壙6か所，第2トレンチにおいては溝2条・土壙1か所を検出することができた。以上の検出遺構のうち，ある程度，時代が把握できるものを列記すると第1トレンチのSD02は，幅0.8m・延長4m・深さ0.9m，SK01は東西幅6mでありSD02と切り合い関係を持つ。また第2トレンチのSD01は，幅1.2m・延長4m・深さ0.8mの規模を有する。またこれ以外の遺構については，前記の遺構と埋土等を同じくすることから同時代頃と考えられる。

第1図　木津遺跡調査地位置図

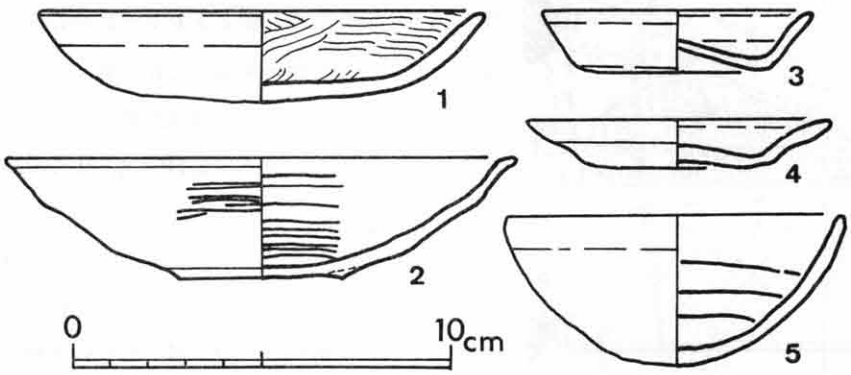
一方，遺構面より下層の層序状態を調査したところ(第2図)，砂層・砂礫層・礫層が交互に堆積しており，これらの各土層からは，遺物の出土がまったくなかったことから，木津川が現在の流路よりも南に流れていた頃の堆積もしくは，木津川の氾濫による堆積と考えられ，遺構の存在は認められない。



第2図　第2トレンチ平面図及び断面図

出土遺物　今回の調査において出土した遺物は，そのほとんどがＳＤ01・ＳＤ02・ＳＫ01から出土したものであり，それらはすべて鎌倉～室町時代を中心とした日常の用器として使用されたものである。第3図の1は土師器の皿である。口径11.8cmを測り内面にハケ目調整を施す。2は瓦器椀である。口径13.6cmを測り内外面に暗文を施す。3・4は土師器の皿である。3は口径7.3cm，4は口径8.2cmを測る。5は瓦器椀であり，口径9cmを測る。普通の瓦器椀と異り，高台を有せず内面のみに暗文およびいぶし焼きを施す。以上の他に羽釜・甕・磁器等が出土している。

まとめ　以上のとおり今回実施した発掘調査の結果を簡単に報告してきた。検出された溝及び土壙等についての性格を明確に把握することはできなかったが，各遺構内から出土した各種の遺物については，当時の日常生活を知るうえで重要な一括資料になるもので



第3図　出　土　遺　物　実　測　図

ある。今後周辺地域で関連遺跡の調査が行われる場合には，その基礎資料となるものであろうと考えられる。また，今後周辺地域において顕著な遺構が検出され，今回の調査結果が補足されることを期待するものである。

（大槻真純＝当センター調査課調査員）

2. 土師南（ハゼミナミ）（福知山高校）遺跡

辻　本　和　美

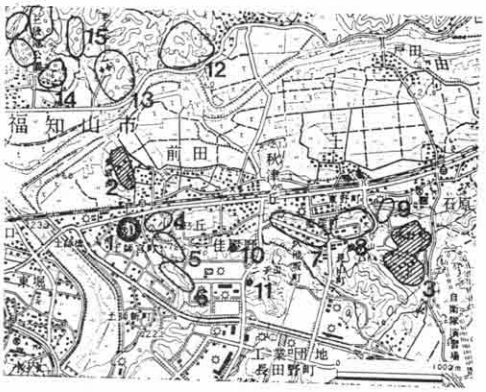
所 在 地　京都府福知山市字土師南650

調査期間　昭和56年7月17日～昭和56年7月25日

調査面積　250㎡

はじめに　京都府教育委員会は，昭和56年度に府立福知山高校の校舎老朽化に伴い，新校舎の増改築工事を計画した。当該地は，由良川の河川平野に張り出した長田野段丘の北縁部に位置しており，周辺には，数多くの遺跡が分布する。

すなわち，当校の北側に位置する愛宕山の丘陵地からは，弥生時代中期の高杯型土器や台付壺が採集されており[注1]，また，当校背後の東方丘陵上には，ゲシ山古墳群（円墳・16基）をはじめ，南町古墳群（前方後円墳・1基，円墳・3基），宝蔵山古墳群（円墳・6基）等が存在する。このうち，宝蔵山古墳群が昭和40年に調査され，1～4号墳から弥生時代末期～古墳時代初頭にかけての多様な埋葬施設が検出されている[注2]。また，ゲシ山古墳では内部主体に箱式石棺をもち，埴輪片が発見されるなど[注3]，福知山盆地に所在する古墳のなかでも若干古い内容をもつものが集まることが注意される。



第1図　調　査　地　位　置　図

当校敷地内からも，これまで土師器片・須恵器が採集されており，何らかの遺構が埋没するものと予想された。このため，各関係機関との協議の結果，事前に

発掘調査を実施することになった。

調査の概要　新校舎は，校地の西側に当る，現在グラウンドやテニスコートに使用されている箇所に予定されており，まず，当地点の土層の状態や遺構の有無を確認するため，試掘トレンチを入れることにした。

3か所（南からA・B・C地点）の新校舎予定域に幅2×長さ10m前後のトレンチを合計10本設営し，重機を用いて順次上面のグラウンド整地土を除去した。その結果，現グラウンド面の下部20～30cmで，黄褐色砂レキ（洪積層）の地山面を検出した。調査地の西方に入れたトレンチでは，地山の下がりの部分でグラウンド造成時の瓦礫の攪乱層を認めたが，その他の部分では，グラウンド造成土の下が直ぐ地山面であった。今回調査を行ったトレンチ内からは，当初予想した遺構・遺物は，全く検出されなかった。

ま と め　今回の調査地点は，現在校舎群の建つ東側部分より一段低い地形を示し，北・南・西の三方の学校敷地境界線から外側は崖状を呈している。すなわち，周辺の地形からみて，当校敷地は，南東からやや北西方向に派生する段丘縁部の傾斜面を削り取って造成したことがうかがえる。

この結果，本来当地点に存在したと思われる古墳ないし集落跡に係わる遺構等は，これら学校用地造成の際，大規模に削平されてしまったものと判断される。

（辻本和美＝当センター調査課調査員）

注1　『福知山市史』第1巻（福知山市役所，昭和51年）。
注2　堤圭三郎「宝蔵山古墳群発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報1967』京都府教育委員会）。京都大学考古学研究会『第17トレンチ』昭和41年。
注3　前掲注(1)

3.　長岡京跡右京第76次（7ANITT Ⅳ 地区）

山口　博

所 在 地　長岡京市今里四丁目

調査面積　約120㎡

調査期間　昭和56年6月5日～昭和56年7月25日

は じ め に

今回都市計画街路外環状線の用地買収に伴う代替地として，財団法人京都府土地開発公社が開発を予定している地は，長岡京跡の推定右京二条三坊の地に相当する。この為，事

前に調査を行い，遺跡の有無を確認し，記録を録るとともに，必要な場合には保存の為の資料を作製することを主な目的として実施した。調査は，造成地内の道路部分を対象とし，諸般の事情から幅４ｍのトレンチを道路部分の西半部に入れ，後進入路となる道路東半部に幅２ｍのトレンチを延長した。トレンチの総延長は約38ｍで，幅４ｍ部分が約18ｍある。調査は，降り続く梅雨の為期間の延長を余儀なくされた。

調査地は，京都府教育委員会が調査を実施した外環状線ＩＴＴ中央部地区(注1)に西接しており，弥生時代から平安時代にかけての遺構の存在の可能性は極めて高い。

調査の概要

調査は，まず道路の西半部に幅４ｍ長さ18ｍのトレンチを入れ，重機で盛土・耕作土を除去し，以後人力で掘削にはいった。耕作土・床土の下は灰色の粘質土層で平安時代の遺物を含んでいる。この層を除去し，褐色の粘質土層の面で遺構を検出した。その後，道路部分の東半部に幅２ｍのトレンチを延長し，褐色粘質土層の面まで掘り下げた。この面では，東西方向に並ぶ柱列を２条と南北方向の掘立柱建物跡を検出した。東西方向に並ぶ柱列のうち北側のものは，柱間距離約270cm（９尺）を計り，２間を有している。南側のものは，柱間距離約240cm（８尺）を計り，３間以上を有している。また，褐色粘質土層の一部には，薄く砂が被っている部分があり，河川の氾濫を受けていた模様である。

褐色の粘質土を除去すると，暗褐色の粘質土層となり，この面で，トレンチ東端部に南北方向の溝（ＳＤ06）を検出した。幅約220cm，深さ約60cmを計り，溝中は砂礫で埋まっており，長岡京期の遺物を出土した。この溝は，西二坊大路の西側溝である可能性が高い。京都府教育委員会が実施した外環状線の調査（右京第12次調査）で検出した西二坊大路と推定される溝も同様に砂礫で埋まっていた。

その後，暗褐色の粘質土層の掘り下げにかかった。この層中からは，古墳時代の遺物が出土した。以前の外環状線の調査では，竪穴住居跡が確認されているが，はっきりした遺構面がつかめないことや非常に土質の違いが見分けにくい土の為，遺構検出作業が難行している。今回の調査においても，遺構面としてはっきりつかめる面はなく，前回調査同様数cmずつ掘り下げては，遺構検出作業を行った。その結果，２基の竪穴住居跡（ＳＢ08，09）を検出した。一つは，

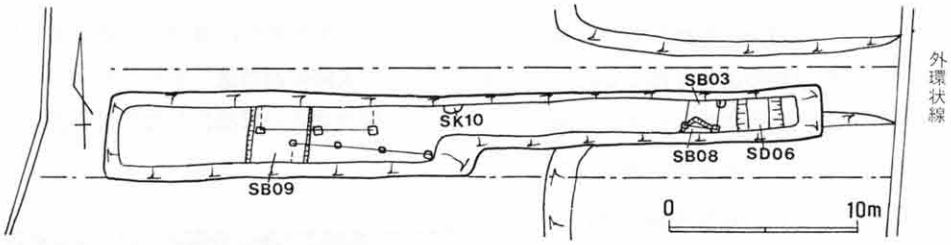
第１図　調査地位置図（1/50,000）

西半部の幅4mのトレンチの中央部で検出したもので，南北の両辺はトレンチ外に存在し，東西の両辺のみを確認した。東西長約350cmを計る。もう一つは，幅2mのトレンチ部分で検出したもので，北西コーナー部分のみを確認したにとどまっている。

第2図　調　査　地　全　景（東から）

また，幅4mと2mのトレンチの境界付近で，より下層から弥生時代の土壙を検出した。北壁にそって存在しており，東西長80cm，深さ40cmを計る。

以上，今まで述べてきたように，弥生時代から平安時代にかけての遺構をいくつか検出し，現地調査を終了した。



第3図　調　査　地　平　面　図

ま と め

今回の調査では，以前の京都府教育委員会の調査で検出したと同様，各種の遺構を検出した。しかし，掘削面積が狭く遺構の性格等に関しては充分に述べることはできない。特に平安時代の遺構は，ピットがいくつか検出されているが，面積が狭く相対応するピットがトレンチ内で検出できず，建物跡等になるのか判らないものが多い。東西方向に並ぶ柱穴も，それぞれ南北方向に対応する柱穴がトレンチ内では存在せず，不明な点が多い。二つの柱列のうち南側のものは，トレンチの南方に対応する柱穴の存在する東西方向の建物跡か柵列であろう。北側のものは，おそらく北側へ延びる建物である可能性が高い。ただ，どちらも推定の域を出ない。

また長岡京期の溝（ＳＤ06）も長さ２ｍ弱を検出したにすぎず，古墳時代の竪穴住居跡もかまどの存在は不明である。

以上述べてきた様に，今回の調査では不明な点が多く，単に各時期の遺構を検出したにとどまった。しかし，今回の調査で各時代の遺構を検出し，以前の調査で確認をされている住居跡が，西方へ一段高くなる直前の当調査地まで及んでいたことが判明した。また今後付近での調査が進むにつれ，多くのことが判ってくるであろう。特に西方の一段高くなった今里台地上の現集落部分にまで広がるのかどうかなど，今後の調査に期待したい。

注１　高橋美久二他「長岡京跡右京第26次調査概要」(京都府教育委員会『埋蔵文化財発掘調査概報（1980-2)』1980)

4.　長岡京跡右京第78次（7ANGAR Ⅱ 地区）

山口　　博

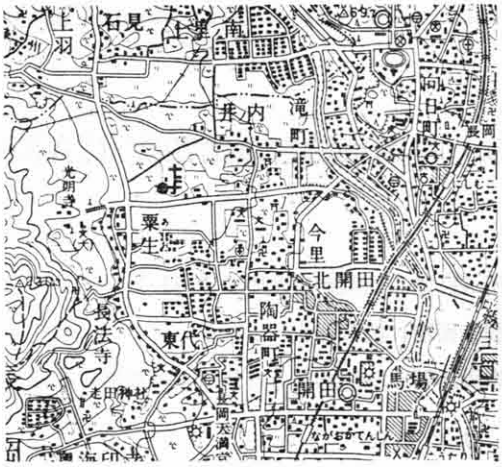
所 在 地　長岡京市井ノ内朝日寺

調査面積　約80㎡

調査期間　昭和56年８月３日～昭和56年８月18日

はじめに

今回の調査は，京都府立向日ケ丘養護学校が，プレイルームを建設するにあたり，当該地が長岡京跡の推定右京二条四坊の地に相当することから，遺構の有無や記録保存を図るとともに，必要な場合には保存の為の資料を作製することを主な目的として実施したものである。調査を実施した向日ケ丘養護学校は，昨年度にもグランドの東端部を調査しており，古墳時代の流路や中世のピット群などが検出されている。今回の調査地は，養護学校の西南部分で，調査地の西方は，現在一段高くなっている。



第１図　調査地位置図（1/50,000）

調査の概要

プレイルーム建設予定地に東西10m南北8mのトレンチを入れ，重機により盛土を除去した。盛土は厚さ約30cmあり，それを除去するとすぐに黄色粘土層の地山となっていた。この面で，遺構精査を行ったが，盛土と同様の土のはいった現代の攪乱壙と褐色の砂礫で埋まった土壙状の落ち込み2か所を確認したにとどまった。現代の攪乱壙は，重機の爪跡状のものなどが存在していることから，養護学校造成時のものと考えられる。褐色の砂礫の埋まっていた土壙状の落ち込みは，遺物の出土は皆無であったが，長岡一帯の地質の調査をなさっておられる橋本清一氏の御教示によれば，前年度の調査で確認した古墳時代の流路と同じ砂礫で埋まっているとのことであった。そのことから，この土壙状の落ち込みは，古墳時代の流路が造成時に削平されて残ったものの可能性が強い。

第2図　調　査　地　全　景（西から）

これらの遺構を掘り上げ，写真撮影・実測図作製を行い，現地調査を終了した。

ま　と　め

今回の調査では，古墳時代の流路の一部と考えられる土壙状の落ち込みの他は，攪乱の土壙を検出しただけであった。養護学校造成時に，大幅に削平を受けたものとみられ，現在の時点では，前記の流路の一部の削り残された部分を除き遺構は存在していない。

5.　長岡京跡右京第79次（7ANNKN 地区）

山　口　　博

所 在 地　長岡京市友岡一丁目1-1

調査面積　約200㎡

調査期間　昭和56年8月19日～昭和56年8月31日

は じ め に

今回の調査は，京都府立乙訓高校の武道館建設に伴い，当該地が長岡京跡の右京五条二

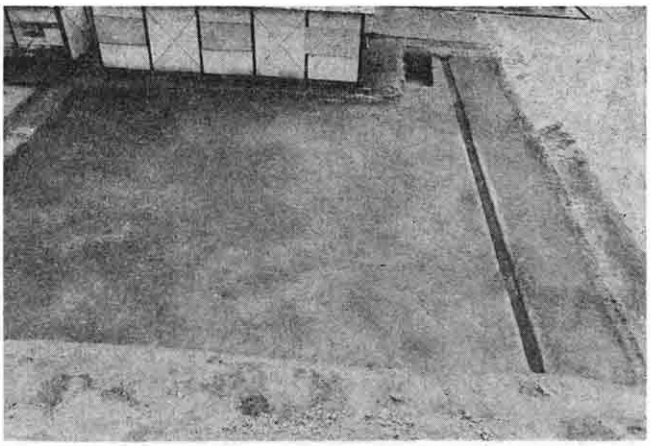
坊に相当することから，遺構の有無を確認し記録保存を図るとともに，必要な場合には保存の為の資料を作製することを主な目的として実施した。調査地には，建築物は建っていなかったが，高校となる以前競馬場として使用されており，あるいは，その際に人の手が加わっている可能性がある。

第1図　調査地位置図（1/50,000）

調査の概要

武道館建設予定地に11m×15mのトレンチを入れ，一部南と北へ4m幅のトレンチを拡張した。重機により盛土を取り去り，以後人力によって掘ることにした。厚さ30～50cmの盛土を除くと，地山と思われる礫の混じった黄褐色の粘土層となる。この面で，遺構精査を行ったところ南北方向に走るコンクリート製の溝と，この溝を埋めているのと同じ土で埋まった浅い土壙状の落ち込みを検出したにとどまった。

その後，トレンチの南壁と西壁に沿って小トレンチを入れ深掘りを行い，下層に遺構面の存在していないことを確認した。



第2図　調査地全景（北から）

まとめ

今回の調査地では，南北方向に走るコンクリート製溝と攪乱壙を検出したにすぎない。このコンクリート製溝は，現在の高校の西の境界と平行して走り，高校の敷地の前身が競馬場のものであることから，馬場の側溝であったものとみられる。こうしたことから，調査地は競馬場建設の際に，大幅に削平を受けたものとみられる。

（山口　博＝当センター調査課調査員）

資料紹介

有熊遺跡の出土遺物

長谷川　　達

1. はじめに

この遺跡は京都府与謝郡加悦町加悦奥小字有熊に所在する。

1973年夏，同志社大学考古学研究会によって発見され，その後，地元有志により，表面採集活動が続けられた結果，縄文，古墳，平安等の各時代にわたる遺跡であることが確認された。

遺跡は京都府でも北部の丹後半島の基部にある宮津湾に流入する野田川の一支流，加悦奥川によって開かれた狭隘な谷にある。その谷の中では比較的広い沖積地のある場所で南側の山塊から北にのびる舌状の台地上に立地し，標高約40mを測る。地山は花崗岩霉爛(バイラン)土が主となり，遺跡部分は現在畑地に利用されている。

ここでは，京都府において比較的遺跡数の少い縄文時代の遺物をとりあげ，紹介する。

第1図　遺　跡　位　置　図 (1/50,000)

2. 縄文土器

早期の土器

全て小破片で器形全体を知ることのできるものはなく，その総数も20片に満たない。第2図1～4は山形文で，3は表裏ともに施文されている。1は山形が大きく，幅1.8cmを計る。暗赤褐色を呈し，砂質の多い胎土で黒色粒の混入物が目だつ。2～4は約0.8cmの幅をもつ細い山形文を有する土器片である。淡黄褐色を呈し，長石，石英等の小砂粒を含む。5，6は楕円文あるいは菱形文の一種と考えられるが，押捺の方向が一定せず，また交差していて，明確な単位が把えられない。7，8は長径約1cm前後の楕円文が疎に押捺され，内面に幅の広い斜行沈線を持つ。5と6，7と8は同一個体である可能性が高く，ともに淡褐色を呈し，器壁は厚く，やや大粒の砂粒が混入されている。数の上では楕円文の方が，山形文よりも多く採取されている。

中期の土器

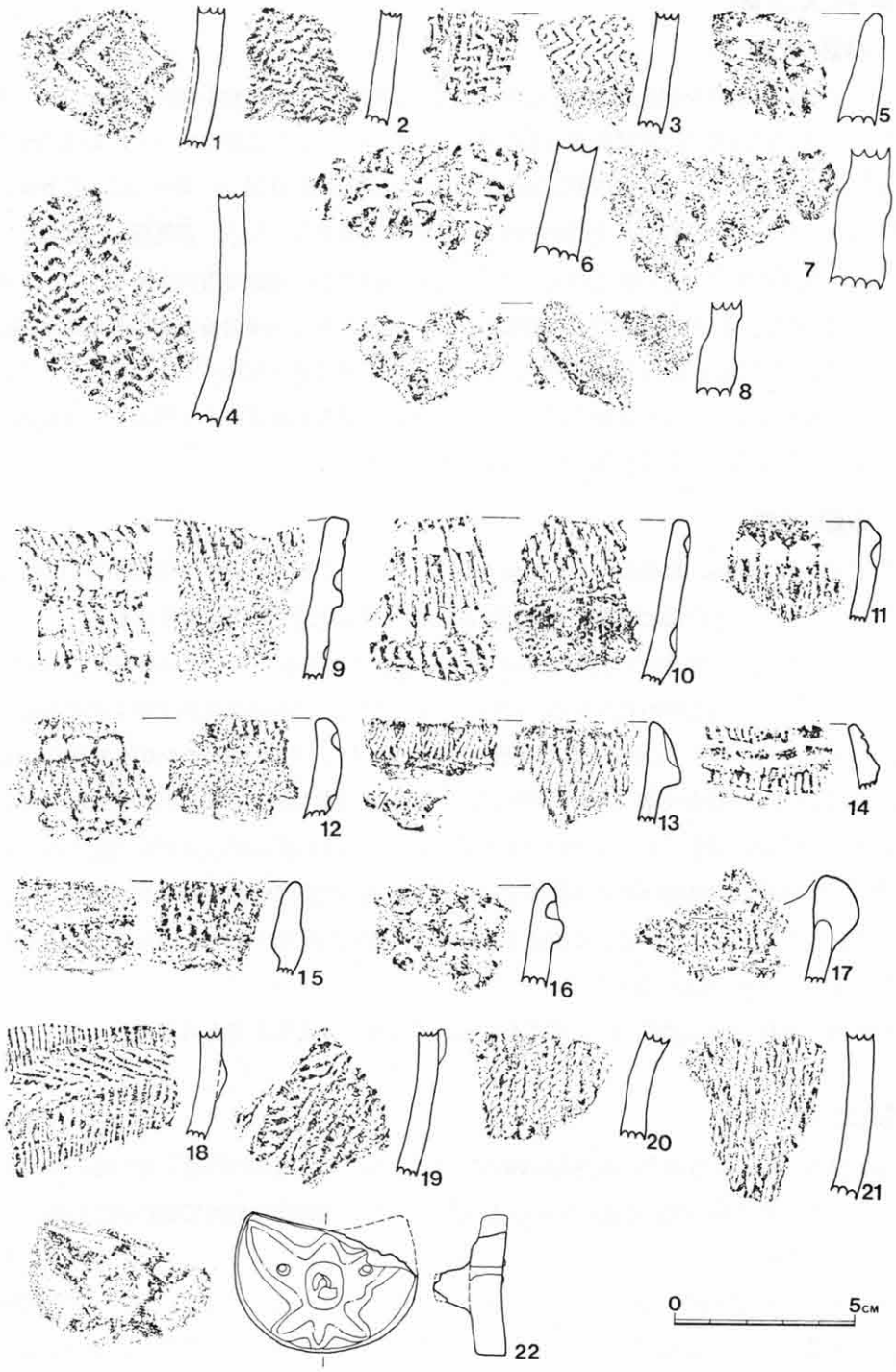
押型文土器に比べ，はるかに多く採集されているが，これも小破片が多く，器形全体を知ることのできるものはないが，大半は深鉢形を呈する土器であると考えられる。

土器面に地文として縦位に硬い繊維の縄文を施すものが多い。他に口縁部付近を中心として，いくつかの文様が見られる。円形の刺突文によって器面を区画する文様を構成するもの（9～12，16），口縁部を外側に折り曲げて肥厚し，その上にアルカ属の貝の背面圧痕を連続してつけたもの（13），円形竹管文（16），半截竹管による押し引き文（14），また大小の波状口縁を呈するものなどがある。また口縁部内面に帯状に縄文を施したものも多い。胴部破片では薄い板状工具によって刻みを施した突帯のめぐらされたもの（18，19）が何点か採取されている。器壁は全体に薄く，茶褐色を呈するものが多く，胎土中に2～3mmの小石粒を含んでいる。

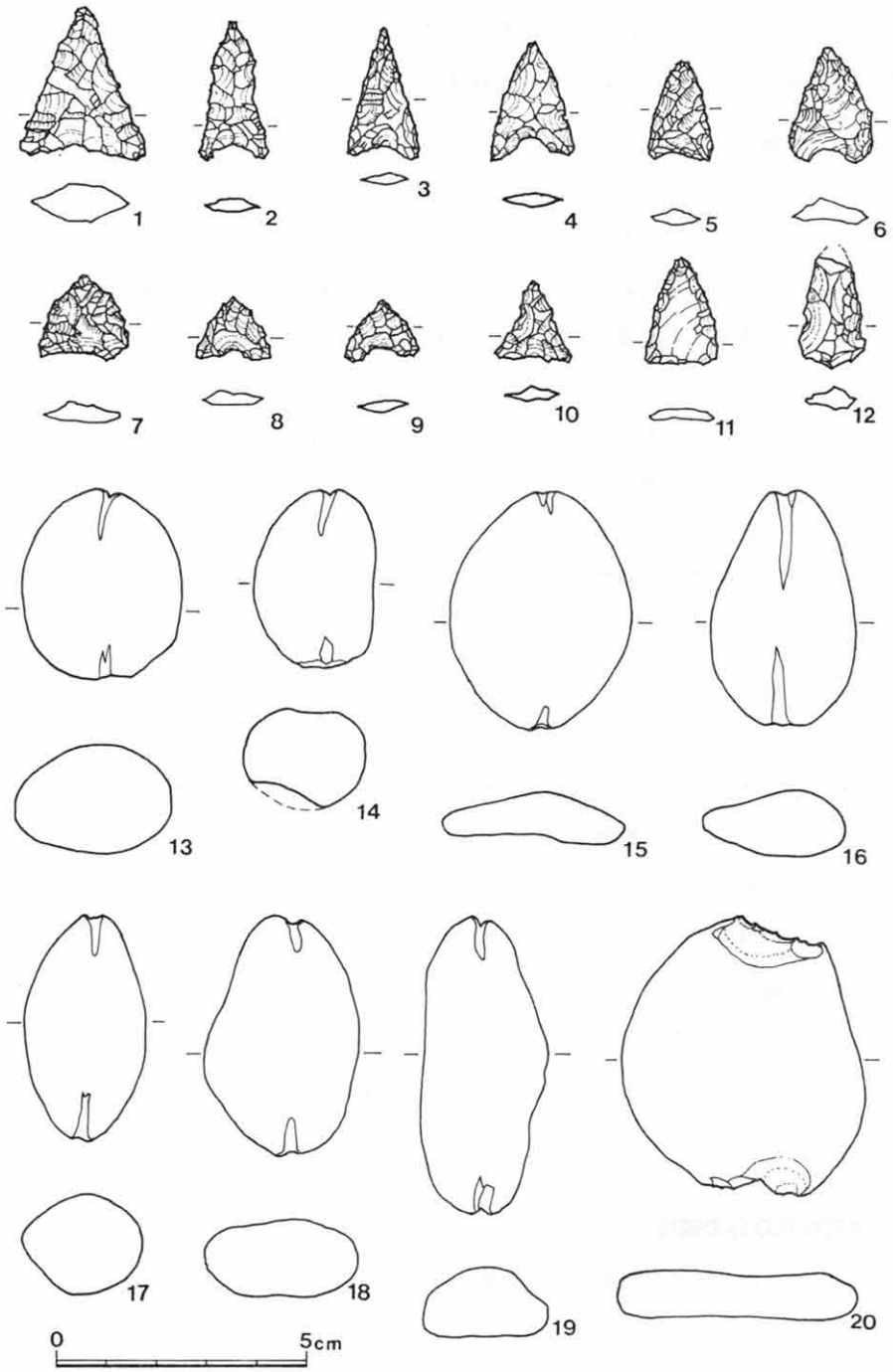
時期は縄文時代中期前半，船元式でも古い段階に並行する頃と考えられる。

3. 土製品

第2図22に示したもので，直径約5cmの円板の一部を切り取った形をしている。中央に断面台形の高まりをつけ，それを中心として左右対称，六方向に極めて低い高まりが削り出され，2か所に穿孔されている。各部の形状を述べると以上のとおりであるが，全体を概観すると抽象的ながら人面を表出したものと考えられる。淡灰褐色で裏面の一部は黒斑状に黒灰色を呈し，石英，長石等の小砂粒が見られるが，胎土は比較的細く，焼成も良好である。時期は縄文時代に属する可能性が高いと考えられるが確定はできない。



第2図　縄　文　土　器　拓　影・土　製　品



第3図 石　器　実　測　図

4. 石　　器

採取されている石器には，石鏃，石匙，石錘，磨石，及び不定形な刃器などがあるが，まとまった数が出土しているのは石鏃と石錘である。

石　　鏃

現在までに完形および一部欠損したものを含め，約250点が採取されている。基部の抉り込みの形状に多種多様な差はあるが，凹基無茎式のものが大半を占め，他に少量ではあるが平基無茎や凸基無茎式に近いものがある。全長約3㎝のものから1㎝前後のものまであり，大きさ，重量ともに様々であるのと同様に形状も長さが幅を大きく上まわるものから，幅が長さを上まわるものや，正三角形に近いものなど各種ふくまれている。

石材(注1)はチャート，サヌキトイド，石英（水晶），粘板岩，黒曜石などが用いられているが，7割以上がチャート製である。黒曜石製は1点，石英製は加工し難い石材の割には数が多い。なお未製品も多く出土している。それぞれを各時期に明確に分離することはできないが，土器の採取状況，他遺跡との比較などから，それらの多くは中期の所産と考えられる。

石　　錘

約60点が採取されている。この数は紐掛用の切目部分の数で算出したものであり，不確定な要素もふくまれている。打割石錘（礫石錘）は2点で他は切目石錘である。形状は縦長のもの，楕円形のもの，断面も円形のもの，扁平なものなど，必ずしも統一されていない。利用している石材も川などで採取できる適当な大きさの転石を利用し，特に規格性はないが，ただ切目を合れる必要からか，全体に軟質なものを用いている。

そ の 他

磨石，敲石が数点，横型の石匙が1点，打製石斧様のものが1点，垂飾の一種かとも考えられるものが1点ある。また，不定形な刃器，使用されたと考えられる剥片は数多く採取されている。

5. 縄文時代以外の遺物

古墳時代の遺物として，須恵器（杯，甕），土師器（高杯，杯，甕），手づくね土器，滑石製模造品などが採取されている。主として6世紀の所産と考えられる。平安時代の遺物として，須恵器，土師器，緑釉陶器があり，さらに時代が下がると天目茶椀等の陶磁器類がある。このように，当遺跡は縄文時代以降，断続的にではあるが，人々の生活の場となっていたことがうかがえる。ただ立地上，面積も限られ，また当地方での一般的ともいえ

る古墳時代，平安時代の集落の立地とも異なることから，大規模に利用されたものではないと考えられる。

6. おわりに

丹後地方の縄文時代の遺跡は近年，徐々にその数が増加しているが，内容は遺物の単独出土的なものも多い。当遺跡と時期[注2]の近似する遺跡で比較的まとまった遺物を出土している所をあげると，押型文が複数で確認されている遺跡は網野町宮の下[注3]，大宮町裏陰[注4]，加悦町嗎岡[注5]遺跡がある。中期前半のものでは，丹後町平[注6]，網野町新樋越[注7]川川底，大江町三河宮の下遺跡[注8]があげられるが，早期，中期とも遺構に伴うものはない。当遺跡の遺物も表採資料であるという性格上，土器と石器のセット関係，ましてや遺構との関係などは不明であるが，数少い当地方の縄文遺跡に内陸部で一例を加えるとともに，石鏃，石錘の数の多いという遺物の様相等からも，今後，当地域の縄文時代を考える上で考慮しなければならない一資料になると思われる。

なお，ここに紹介した資料は現在，加悦町農村文化伝習センター内に保管，展示されている。また文末ながら，この紹介に際して資料，施設等の使用を快く承諾していただいた加悦町教委員会に心から御礼申し上げます。

（長谷川　達＝当センター調査課調査員）

注1　石材の一部に関しては橋本清一氏の御教示を得た。

注2　同志社大学考古学研究会ＯＢの天野末喜氏の御教示によれば，発見の契機となった踏査の時，擦消縄文を施した後期に属すると考えられる土器が採取されたとのことである。しかし，その後の踏査では一片も採取されていないため，ここでは早・中期だけを取り上げた。

注3　岡田茂弘「京都府宮ノ下遺跡出土の土器」『貝塚 70』1957

注4　杉原和雄他『裏陰遺跡発掘調査概報』京都府大宮町教育委員会 1979

注5　浪江庸二・金村允人・佐藤晃一『後野円山古墳群発掘調査報告書』加悦町教育委員会 1981

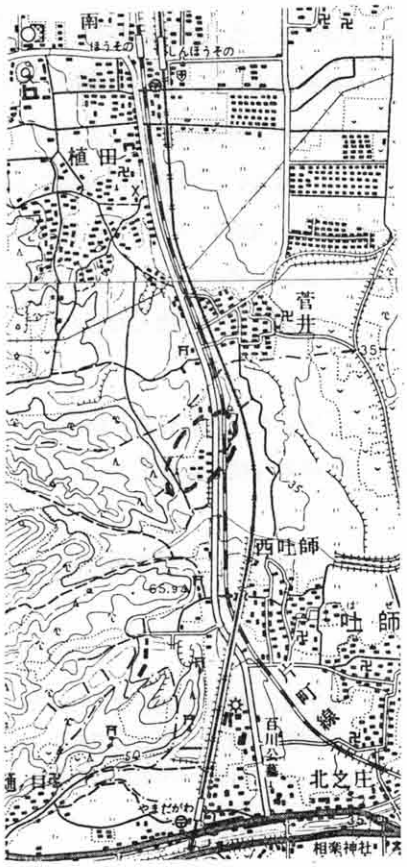
注6　堅田直「京都府丹後町平遺跡調査概要」『帝塚山大学考古学シリーズⅠ』帝塚山大学考古学研究室 1966

注7　島田信行「京都府網野町柳谷出土の縄文土器」『史想11』紫効史学会 1961

注8　竹原一彦「宮ノ下遺跡発掘調査概要」『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会 1981

府下遺跡紹介

3. 吐師七ツ塚古墳



第1図　吐師七ツ塚古墳位置図

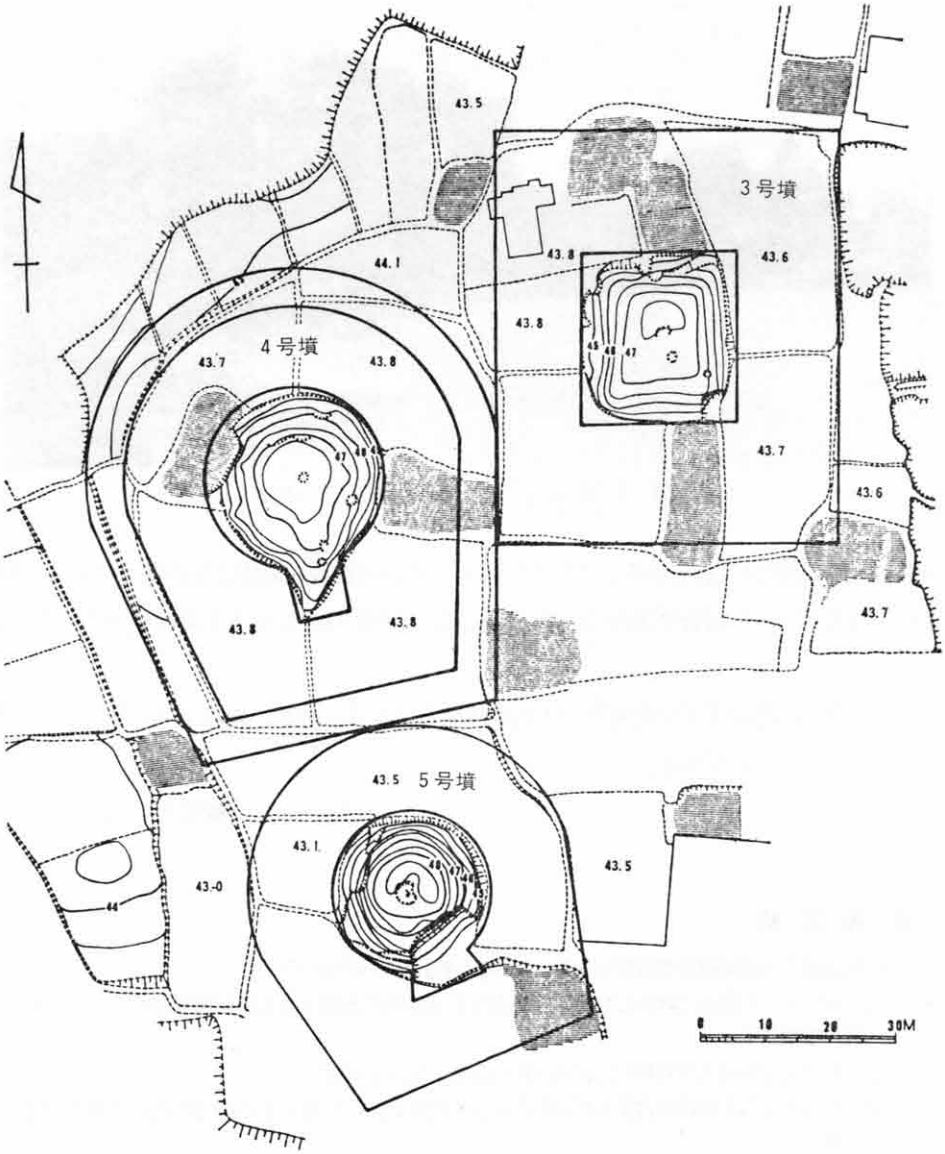
南山城地方には，椿井大塚山古墳，高麗寺跡，恭仁宮跡，山城国分寺跡など種々の遺跡が点在している。そのような中で，近鉄京都線の新祝園駅と山田川駅のほぼ中間点，相楽郡木津町大字吐師小字中ノ中条に吐師七ツ塚古墳がある。

古墳は生駒山系の東裾を形成する丘陵の端部，東の山城盆地へと舌状に張り出した低台地上に築かれている。台地のすぐ東側には府道・国鉄・近鉄が南北に平行して走っているが，古墳のある一画は，そのような喧噪からまったく隔絶され，あたかも時間から取り残されたような独特な雰囲気に包まれている。

ところで，「七ツ塚」という名が示すように，もとは7基の古墳があったはずであるが，現在では3・4・5号墳と呼んでいる3基が残っているにすぎない。これらの3基の古墳は，いずれも旧状をよくとどめており，周囲には周濠がめぐり，埴輪・葺石の使用が確認されている。

3号墳は裾部がかなりの削平を受けているが，東西約23.5m，南北約26.0m，高さ約4.4mを測る南北に長い長方形墳である。昭和38年に墳丘の西側裾の部分から多量の埴輪片が発見されている。4号墳は径約28.0m，高さ約4.0mの後円部に7.0m前後の短い前方部をもつ，いわゆる帆立貝式古墳である。ただし，前方部は東半分が削られており三角形になっている。5号墳は現状では径約25.0m，高さ約6.0mの円墳であるが，かつては4号墳と同じく帆立貝式古墳であったらしい。

以上の現存する3基以外に，昭和8年の府道新設工事の際に破壊された2号墳のことが，『京都府史蹟名勝天然記念物調査報告』第14冊に記録されている。それによると，2号墳は3号墳の東方にあり，変形四獣鏡1面，直刀5口，馬鐸1個，ガラス玉約40個，滑石製



第3図　吐師七ツ塚古墳地形図（『南山城の前方後円墳』による）

第2図　4 号 墳（右）と 5 号 墳（左）（北から）

臼玉約300個が発見されている。これらの出土品や，現在墳丘の周辺から発見される埴輪片から判断して，吐師七ツ塚古墳の築造年代は，5世紀代すなわち古墳時代中期と考えられている。

このように，府道工事や開墾等で4基が消滅してしまったが，現存する3基の古墳は永久に保存したいものである。

（編集部＝田中　彰）

参 考 文 献

岩井武俊「山城國相楽郡西部の古墳」（『考古界』5-3）明治38年
梅原末治・赤松俊秀「吐師七つ塚古墳發見品」（『京都府史蹟名勝天然紀念物調査報告』第14冊）昭和8年
龍谷大学文学部考古学資料室『南山城の前方後円墳』昭和47年
堤　圭三郎「京都府内の古墳の概要」（『古墳・埋蔵文化財』（財）京都府文化財保護基金）昭和47年
樋口隆康編『京都考古学散歩』学生社 昭和51年

センターの動向

1. できごと（7月～11月）

7.27　羽戸山遺跡（宇治市）発掘調査開始～11.19

8. 3　長岡京跡右京78次（長岡京市，府立向日ケ丘養護学校内）発掘調査開始～8.18

8.6～8　第9回古代サマー・セミナー―愛媛県東予市，松山市―出席（田中調査員）

8. 7　大内城跡，豊富谷丘陵遺跡群（以上福知山市）関係者経過説明会実施

8. 8　豊富谷丘陵遺跡群（福知山市）現地説明会実施，約50名参加

8.10　橋爪遺跡（久美浜町）発掘調査開始～10.3

8.18　後青寺跡（福知山市）発掘調査開始～9.18

8.19　長岡京跡右京79次（長岡京市，府立乙訓高校内）発掘調査開始～8.31

8.20　広隆寺跡（京都市右京区）現地調査終了7.9～

8.24　中尾古墳（伊根町）発掘調査開始～10.5

8.28　大内城跡（福知山市）調査打合せ会実施，百田昌夫，藤井善布，芦田重治芦田豊，石坪一郎，塩見行雄，小滝篤夫の各氏出席

8.29～30　第10回埋蔵文化財研究会―於九州歴史資料館―出席（村尾調査員）

8.30　京都市埋蔵文化財調査センター主催第5回調査成果交流会―於京都大学楽友会館―で，大槻調査員「恭仁宮跡昭和55年度発掘調査」発表

9. 2　燈籠寺遺跡（木津町）発掘調査開始～9.30

9. 3　篠・西長尾窯跡（亀岡市）現地説明会実施，約80名参加

9. 5　園部城跡(園部町)関係者説明会実施

9. 7　平安京跡（京都市上京区，精神薄弱者更生相談所建築予定地）発掘調査開始～11.6

9.12～13　輸入陶磁器研究会―於青山学院大学―出席（伊野調査員）

9.16～26　奈良国立文化財研究所主催昭和56年度埋蔵文化財発掘技術者専門研修「集落遺跡課程」参加（久保田調査員）

9.17　条里制跡（亀岡市大井町）発掘調査開始～12.5

9.21　平安宮跡（京都市中京区，府立朱雀高校内）発掘調査開始～10.8

9.24　燈籠寺遺跡（木津町）関係者説明会実施

中尾古墳（伊根町）現地説明会実施約60名参加

9.30　橋爪遺跡（久美浜町）現地説明会実施，約40名参加

10. 6　宮遺跡（福知山市）発掘調査開始

10.15　羽戸山遺跡（宇治市）関係者説明会実施

10.17　長岡京跡発掘調査研究所主催第3回スライドによる乙訓発掘だより―於長岡京市産業文化会館―で，石尾調査員「長岡宮跡第109次調査」発表

10.20　園部城跡（園部町）現地調査終了 7.13～

10.23～24　全国埋蔵文化財法人連絡協議会研究会―大阪市―出席(白塚総務課長，安田主事，堤調査課長，長谷川，辻本石井，小泉調査員)

10.24～25　日本オリエント学会―於東京都―出席（小山調査員）

10.27　稚児野遺跡（夜久野町）発掘調査開始～11.28

10.31　平安京跡（精神薄弱者更生相談所建築予定地）関係者説明会実施

10.26　長岡京跡右京83次（長岡京市，都市計画道路石見，淀線内）発掘調査開始

11. 7　羽戸山遺跡（宇治市）現地説明会実施，約50名参加

11.11　長岡京跡右京84次（長岡京市，外環状線内）発掘調査開始～12.26

11.18　長岡京跡右京87次（大山崎町）発掘調査開始～12.17

2.　普及，啓蒙事業

9.26　第1回研修会―於当センター資料室―開催，（発表者及び題名）松井忠春，竹原一彦「福知山市大道寺跡の発掘調査」水谷寿克，石井清司「亀岡市篠・西長尾窯跡の発掘調査」杉原和雄「丹後地方の須恵器」近藤義行「久世廃寺の歴史的意義」参加者63名

9.30　『京都府埋蔵文化財情報』創刊号 刊行

10.24　第2回研修会―於丹後郷土資料館第1研修室―開催，（発表者及び題名）田中光浩「峰山町弥生時代墳墓について」中嶌陽太郎「宮津市中野遺跡の発掘調査」中村孝行「綾部市綾中，青野遺跡の発掘調査」小泉信吾「福知山市向野西古墳群の調査」参加者48名

10.25　第1回講演会―於丹後郷土資料館―開催，（講師及び演題）中谷雅治「恭仁宮跡の発掘調査について」中山修一「丹後国府と長岡京」参加者87名

府下報告書等刊行状況一覧（56.1～56.11）

発掘調査報告書関係

『大明神古墳群』（久美浜町文化財調査報告 第4集）久美浜町教育委員会 1981.7

『下山横穴墓発掘調査報告書』（峰山町文化財調査報告 第7集）峰山町教育委員会 1981.3

『中野遺跡第2次発掘調査概要』（宮津市文化財調査報告3）宮津市教育委員会 1981.3

『宮津城跡第2次発掘調査概要』（宮津市文化財調査報告4）宮津市教育委員会 1981.3

『後野円山古墳群発掘調査報告書』（加悦町文化財調査報告 第4集）加悦町教育委員会 1981.3

『志高遺跡調査概報』舞鶴市教育委員会 1981.3

『向野西古墳群発掘調査概要報告書』（福知山市文化財調査報告 第4集）福知山市教育委員会 1981.3

『綾部市文化財発掘調査報告』第8集 綾部市教育委員会 1981.3

『温井13号墳発掘調査概報』（園部町埋蔵文化財調査報告書 第3集）園部町教育委員会 1981.3

『御上人林廃寺第六次発掘調査報告』（亀岡市文化財調査報告書第11集）亀岡市教育委員会 1981.3

『京都府長岡京市下海印寺遺跡第3次範囲確認調査概報』（長岡京市文化財調査報告書第7冊）長岡京市教育委員会 1981.3

『長岡京市文化財調査報告書』第8冊 長岡京市教育委員会 1981.3

『大山崎町埋蔵文化財調査報告書』第1集 大山崎町教育委員会 1981.3

『城陽市埋蔵文化財調査報告書』第10集 城陽市教育委員会 1981.3

『平安京跡発掘調査報告』（昭和55年度）京都市埋蔵文化財調査センター，（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981.3

『鳥羽離宮跡調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『六勝寺跡発掘調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『南春日町遺跡発掘調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『中臣遺跡発掘調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『北白川廃寺跡発掘調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『大藪遺跡発掘調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『長岡京跡発掘調査概要』（昭和55年度）　同上 1981.3

『樫原廃寺発掘調査概要』（昭和55年度）京都市埋蔵文化財調査センター，(財)京都市埋蔵文化財研究所 1981.3

『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報Ⅱ』（1976年度）京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会 1981.3

『平安京左京五条三坊十五町』（平安京跡研究調査報告 第5輯）(財)古代學協會 1981.7

『京都大学埋蔵文化財調査報告Ⅱ』京都大学埋蔵文化財研究センター 1981.3

『京都大学構内遺跡調査研究年報』(昭和55年度)京都大学埋蔵文化財研究センター 1981.9

『園部盆地における考古学的調査』同志社大学考古学実習室園部町遺跡分布調査研究会 1981.3

『同志社構内地下鉄烏丸線今出川駅地点の発掘調査』同志社大学校地学術調査委員会 1981.5

当センター現地説明会及び中間報告資料

現地説明会

「千代川遺跡」1981.7.28

「豊富谷丘陵遺跡」1981.8.8

「篠窯跡群・西長尾窯跡（国道9号バイパス関係遺跡)」1981.9.3

「中尾古墳」1981.9.24

「橋爪遺跡」1981.9.30

「羽戸山（宇治団地＜仮称＞予定地内関係遺跡)」1981.11.7

中間報告

「大内城跡（近畿自動車道舞鶴線関係遺跡)」1981.8.6

「大内城跡（近畿自動車道舞鶴線関係遺跡)」1981.8.28

「園部城跡（園部高校校舎増改築工事にともなう発掘調査)」1981.9.5

「木津遺跡」1981.9.21

「燈籠寺遺跡（内田山古墳)」1981.10.6

「羽戸山（宇治団地＜仮称＞予定地内関係遺跡)」1981.10.12

「稚児野遺跡」1981.11.27

現地説明会資料

「田辺城遺構発掘調査」舞鶴市教育委員会 1981.7.25

「志高遺跡」舞鶴市教育委員会 1981.10.30

「綾中遺跡発掘調査」綾部市教育委員会 1981.6.6

「青野南遺跡発掘調査」綾部市教育委員会 1981.8.8

「隼上り遺跡」宇治市教育委員会 1981.9.12

「宮津城跡第２次発掘調査」宮津市教育委員会 1981.3.28

「中野遺跡第３次」宮津市教育委員会 1981.8.29

「芝ケ原遺跡発掘調査概要」城陽市教育委員会 1981.5.30

「長岡宮跡第109次（７ＡＮ14Ｍ地区）調査」向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1981.5.23

「左京第70次（７ＡＮＦＫＯ地区）発掘調査」向日市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1981.5.30

「長岡京跡第100次（７ＡＮＩ０Ｉ）発掘調査」向日市教育委員会 1981.10.31

「長岡京跡右京65次（７ＡＮＭＭＢ―Ⅲ）発掘調査」長岡京市教育委員会 1981.3.14

「長岡京跡右京第70次調査（７ＡＮＯＩＲ地区）」長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1981.7.11

「長岡京跡右京72次（７ＡＮＧＫＳ地区）調査」長岡京市教育委員会・長岡京跡発掘調査研究所 1981.8.29

「長岡京跡右京第77次（７ＡＮＫＳＭ地区）調査」長岡京市教育委員会 1981.8.29

「京都府南原古墳の調査」大阪大学文学部国史研究室 1981.8.1

「右京第69次発掘調査（７ＡＮＳＤＤ地区）」大山崎町教育委員会 1981.7.11

「昭和55年度恭仁宮跡発掘調査概要」京都府教育委員会 1981.1.10

「周山窯址」京北町教育委員会・京都大学文学部考古学研究室 1981.8.9

「三河宮の下遺跡」京都府教育委員会 1981.3.28

「大山古墳群」丹後町教育委員会 1981.8.28

「いもじや古墳」弥栄町教育委員会 1981.7.31

「湯舟坂２号墳」久美浜町教育委員会 1981.10.31

「青野遺跡」綾部市教育委員会 1981.11.14

「青野南遺跡」綾部市教育委員会 1981.11.14

「同志社大学精思館地点の発掘調査」同志社大学校地学術調査委員会 1981.10.28

その他の雑誌，報告，論文等

『京都府埋蔵文化財情報』創刊号（財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1981.9

『丹後郷土資料館報』第２号 京都府立丹後郷土資料館 1981.3

『丹波焼守田コレクション』(特別陳列図録８）京都府立丹後郷土資料館 1981.4

『丹後の守護・守護代』（特別陳列図録9）京都府立丹後郷土資料館 1981.7
『藤織りの世界』（特別展図録12）京都府立丹後郷土資料館 1981.10
『京都市考古資料館年報』（昭和54・55年度）京都市考古資料館 1981.3
『名勝双ケ岡保存整備事業報告』（昭和55年度）京都市文化観光局 1981.3
『京都夜久野の文化財』夜久野町教育委員会 1981.1
『京都考古』（第1号～第22号合冊）京都考古刊行会 1981
『長岡京』（長岡京跡発掘調査研究所ニュース第19号～第22号）長岡京跡発掘調査研究所
『大山崎町史』史料編　大山崎町史編さん委員会 1981.3
『宇治の文化財』宇治市教育委員会 1981.3
『久御山町の今昔』久御山町郷土史会　1981.11
釋　龍雄「丹後地方における弥生時代前期の様相」『第9回埋蔵文化財研究会資料』1981.1
水谷寿克「丹波浄法寺城」『丹波史談』109号 口丹波史談会 1981.2
杉原和雄「京都府北部出土の土師製筒形容器とその伴出品」『史想』第19号 京都教育大学考古学研究会 1981.3
宇野隆夫「北白川廃寺跡出土の土器・陶磁器」『考古学メモワール 1980』京都大学考古学メモワール編集委員会 1981.5
岡内三真・和田晴吾・宇野隆夫「京都府長岡京市カラネガ岳1・2号古墳の発掘調査」『史林』64巻3号 1981.5
黒田恭正・杉本　宏「京都府久美浜町橋爪遺跡出土の木器について」『古代文化』33-3 1981.3
寺島孝一「平安京烏丸小路の側溝」『古代文化』33-4 1981.4
中谷雅治「恭仁宮官衙の正殿跡」『古代文化』33-6 1981.6
植山　茂「古代瓦私見㈢ ―平安京豊楽院の古瓦(1)―」『古代文化』33-8 1981.8
植山　茂「古代瓦私見㈣ ―平安京に運び込まれた瓦(1)―」『古代文化』33-9 1981.9
植山　茂「古代瓦私見㈤ ―平安京豊楽院の古瓦(2)―」『古代文化』33-11 1981.11

受 贈 図 書 一 覧（8～11月）

（財） 大阪文化財センター	考古展 河内平野を掘る 亀井・城山
（財） 古 代 學 協 會	古代文化 第272号～第274号 平安京左京五条三坊十五町（平安京跡研究調査報告 第5輯）
（財） 愛媛県埋蔵文化財調査センター	一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書 Ⅰ～Ⅲ 一般国道33号砥部道路関係埋蔵文化財調査報告書 Ⅱ
京都大学埋蔵文化財研究センター	京都大学構内遺跡調査研究年報（昭55年度）
（財） 広島県埋蔵文化財調査センター	石鎚権現遺跡群発掘調査報告
（財） 千葉県文化財センター	公津原 Ⅱ
滋賀県教育委員会	榿木原遺跡発掘調査報告 Ⅲ
日本貿易陶磁研究会	貿易陶磁研究 No. 1
園部町教育委員会	温井13号墳発掘調査概報（園部町埋蔵文化財調査報告 第3集）
（財） 東京都埋蔵文化財センター	多摩ニュータウン遺跡（昭和55年度）第1分冊～第4分冊 東京都埋蔵文化財センター年報 Ⅰ（昭和55年度）
羽曳野市埋蔵文化財調査センター	西浦銅鐸（羽曳野市埋蔵文化財調査報告書 1） 古市遺跡群発掘調査報告書（ 同 2） 古市遺跡発掘調査報告書（ 同 3） 茶山遺跡発掘調査報告書（ 同 4） 古市遺跡群 Ⅱ（ 同 5） 東阪田遺跡—1980—（ 同 6） 羽曳野の終末期古墳（羽曳野市の文化財 第1集）
宮津市教育委員会	宮津城跡第2次発掘調査概要（宮津市文化財調査報告 4）
加悦町教育委員会	後野円山古墳群発掘調査報告書（加悦町文化財調査報告 第4集）
長岡京跡発掘調査研究所	長岡京 第21号

京都府立丹後郷土資料館	藤織りの世界
大山崎町史編さん委員会	大山崎町史 史料編
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会	京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報 Ⅰ（1974，75年度） 同　Ⅱ（1976年度）
久美浜町教育委員会	大明神古墳群（久美浜町文化財調査報告 第4集）
名古屋市見晴台考古資料館	館蔵品図録 Ⅰ，同 Ⅱ 見晴台遺跡第19次発掘調査の記録 第20次記念見晴台遺跡発掘調査のあゆみ 見晴台遺跡緊急発掘調査概要報告書 H-15号窯跡発掘調査概要報告書 長先、見寄町地区発掘調査概要報告書 大曲輪遺跡発掘調査概要報告書 NN 314号古窯跡発掘調査報告書
土井ケ浜考古館	土井ケ浜遺跡
木更津市金鈴塚遺物保存館	特別展 古代の木更津
舞鶴市教育委員会	桑飼下遺跡発掘調査報告書
（財） 鳥取県教育文化財団	長瀬高浜遺跡発掘調査報告書（鳥取県教育文化財団調査報告書5） 長瀬高浜遺跡 Ⅳ（同6） 布勢遺跡発掘調査報告書（同7）
（財） 埼玉県埋蔵文化財調査事業団	関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅺ 日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財発掘調査報告 Ⅴ 倉林後遺跡 上ノ台遺跡
伊那市教育委員会	金鋳場遺跡緊急発掘調査報告
（財） 滋賀県文化財保護協会	滋賀県文化財目録（昭和56年度追録）
峰一合遺跡中部山岳考古館	岐阜県考古 第8号
（財） 辰馬考古資料館	昭和56年度 秋季展 丹波三ツ塚遺跡 Ⅲ

東大阪市郷土博物館	河内の古墳をたずねて
青梅市郷土博物館	千ケ瀬遺跡と多摩の縄文 崩橋遺跡・霞台遺跡群昭和55年度調査概報
平賀町立郷土資料館	堀合Ⅰ遺跡（平賀町埋蔵文化財報告書 第9集）
日立市郷土博物館	日立市赤羽横穴墓群発掘調査報告書(日立市文化財調査報告書 第2集)
城陽市教育委員会	城陽市埋蔵文化財調査報告書 第10集
渡 辺 宏 之	方南峰遺跡（文化財シリーズ 21） 釜寺東（方南2丁目都営住宅跡地内埋蔵文化財調査報告書）
小 暮 広 史	東の上遺跡（所沢市文化財調査報告書 第1集）
村 川 行 弘	花岡遺跡発掘調査概報（大阪経済法科大学考古学研究報告 第2集） 河内大竹遺跡（　同　第5集）
浜 野 一 重	一色遺跡（神奈川県埋蔵文化財調査報告 20） 日高町遺跡分布調査報告書 小室天神遺跡

――編 集 後 記――

京都府熊野郡久美浜町須田の湯舟坂2号墳出土の環頭太刀は新聞報道等で大きく取り扱われ，世の注目するところです。金色に輝く太刀は古代より以上に，現代においても威力を示したと思われます。光り輝く太刀とは別に，府下の埋蔵文化財は古代ロマンなど，どこ吹く風で，きびしい状況下にあります。その中で多くの発掘調査は進められ資料は増加の一方です。本誌の使命は，その情報をより良く伝えるものにしたいと考え，回を重ねる度に発展したいと思います。多くの御批判，叱責をお待ちしています。また今号から考古資料ノート，資料紹介の項を加えました，断続的ですが続けたいと思いますので，お手持の資料等で本誌に投稿していただければ幸いです。

（編集担当＝小泉信吾）

京都府埋蔵文化財情報 第2号

昭和56年12月25日

発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒602 京都市上京区広小路通寺町東入ル中御霊町424番地
℡ (075)256-0416

印刷　中西印刷株式会社
代表者　中西　亨
〒602 京都市上京区下立売通小川東入
℡ (075)441-3155（代）